国語方言学

新語論

柳田国男

國語科學講座

— VII —

國語方言學

新語論

柳田國男

株式會社
明治書院

國語科學講座

— VII —

國語方言學

新語論

柳田國男

株式會社
明治書院

目次

新語論

柳田國男

一　問題の範圍

言語史はちやうど政治史などとは正反對に、記錄文書の史料が具はらず、且つ年立時代別の目標を見つけることが不可能である故に、假にその研究の動機が今日のやうに、さし當つた色々の疑惑を釋くに在る場合で無くとも、やはり我々の眼の前の事實、もしくは最も手近なる言語現象の、容易に何人にも認識し得られるものから發足して、所謂倒叙式に調べて行く必要がある。今まで斯道に向つて切々の志を抱く者が、日本では兎角古いことばかりを說かうとして居たのは、手短かにいふならば一派有力の史學の、不本意なる感染であつたと思ふ。無論さういふ方法にも、幾多の獨立した結構な發見は有り得る。たゞそれが現在の多數人から答を待たれて居る根本の問、どうして一つの國語が僅かな歲月の間に此樣にまで大きな變化をしなければならなかつたかの說明と、餘りにも懸け離れて居ることを憾むのみである。此問題を處理する第一步は、先づ御互ひの知つて居る區域に於て、言葉が時につれてどう言ひかへられ、もしくは地を隔てゝどう言ひちがへられて居るかを明かにすることである。眼のあたりの現象ならば想像を加へずに、直接にその原因を究むる方法がある。その原因が見つかると、次にはその同じ法則が、以

前も同種の場合に働いて居たのではないかといふ問題に、近よつて行く手がゝりが出來たことになるのである。五十年百年後の日本語が如何に變化するだらうか、乃至は又如何に改まらしむべきものであるかといふことも、極めて重大な問題には相違ないが、それもこれも自分の今までの經歴を、知つてから後のことで無ければならぬ。ところが多くの先生は過去の「何故」を明かにして居らぬのみならず、まだ最近の「如何に」をさへ答へようとしない。さうして中古以前の國文的事實だけを說かうとするのだから、全くひどいと謂つてよいのである。私の採る所の方法は素人として、單なる一個の日本語利用者として、夙に起さずには居られなかつた疑問に、正面から答へて見たいといふ計畫の上に立つて居る。答はたゞ僅かに次のよりよきものゝ現はれる迄の、暫定的のものに過ぎないが、問としては相應に有力に且つ永く、卽ち日本に一國言語史の成立つてしまふまで、引込め又は片よせて置くことの出來ぬものである。

二　方法と用語

私の問題は自然に二つに分れる。その一つは言語の時代差、卽ち明治の初年の東京で聽いた言葉と、昭和の今日の同地の言葉と、どれだけ違つて居り又何故にその相異を生じたかであり、第二はその中央都市と信州越後、乃至は九州東北の諸縣と、今尙可なりの變化があるのは何故か。卽ち言語の地方差の理由である。この二通りの現象は、原因が或程度まで共通であつたと見てよい。自分は前々から相應に數多い證跡に據つて、二者の關係を非常に深いものと見て居り、ここでも重ねてそれを說くつもりであるが、それを信受し得ぬ人々でも、これが丸々別筋の路を步み、全くちがつた法則に支配せられて居ると迄、考へて居る人は多分無いので、結局は程度問題に歸着すると思ふ。概括的な論斷は實は出來るものでは無く、又最初からさうきめて掛る必要も私には無い。我々の方法からいふと、時の變化は僅か半世紀の前でも、もう立證が現在ほど安全で無い。個人の記憶を信ずるか、偶々書き殘さ

れたものを誤り無しとするか。とにかく少しばかりは我々の手で實驗し難いものを、判別によつて承認しなければならず、それには旁證を要し又若干の習熟を要する。だから順序としては先づ方言の差異に通じ、その比較を明かにすることに主力を傾け、次いで第二段に過去の事實へ、入つて行くやうにした方がよいかと考へる。この竪横二つの變化が、假に異なる道程を取つて居るものとすれば、勿論斯ういふ取扱ひ方をすべきであるし、或は又自分などの推測の如く、結局は一つの現象の視角の差であつたことがわかるにしても、やはり一應は別々に考へて行くのが便利である。方言に就いては既に或程度の資料が集まつて居るに反して、一方の事實はまだ些しも整理せられては居ない。かたがた此方には卽座に手を下すことが出來ぬのである。

そこで愈〻この限定せられたる第一次の問題について考へて見る。現在日本人の當面する國語の地方差は、果して何の理由を以て生れたものであるか。單なる歴史の一偶然であつたか。但しは避けんとしても避けられなかつた成長形態とも名くべきものであつたか。ともかくもどういふ力が働いて、この顯著なる社會事實を作り上げたか。これは苟くも方言採集の事業に携はるほどの人ならば、最初に抱くべき疑問であり、或は寧ろその動機となるべき疑問でもあるのだが、不思議に今まではこれに關心を示した者が尠ない。自然史の方面などでは、採集といへば必ず目途があり、それを學業の用に供しなければ、集めて來たゞけでは調査でも研究でも無く、明瞭に草刈り雜魚すくひの仕事とは區別して居るけれども、方言の方では言葉の内容を確かめる任務にある人たちが、却つてその研究上の用語を混亂させて居る。獨り「採集」といふ一語が、不當に寛大に使はれて居るのみで無い。他の多くの方言に關係ある用語、殊にこの方言といふその語自身までが、今はまだ人によつて、どんな違つた意味にも用ゐてよい樣な實狀である。或はこの

亂雜を整理するが爲に、一日も早く標準語を以て全國を統一しようといふ人も有るか知らぬが、それは問題を逃避するに過ぎない上に、その標準語といふ一語が、やはり近よつて見れば見るほど、定まつた眼鼻の無いものゝやうに考へられる。必要なる最初の一致は、何とかしてこの紛糾を極めた眼前の言語現象の一團を、出來るだけ今後の研究に便利な様に、區劃し又解析して行くことに在ると思ふ。自分の試案は必ずしも強力なる主張では無い。次の今一段と便利なる分類法の現はれる迄、假に斯うして置いて意見を進めて見るだけである。目的はたゞ國語の歴史を明かにするより他には無い。

三　地方言語事實

「方言」といふ單語の範圍を、廣く狹く勝手に解して行くといふことは、何はさし置いても非常に不便な話である。新たに設けられた學術上の用語ならば、一應は發明者の定義次第として置いてもよいが、既に或程度まで社會の通用に供せられて居る以上は、我々は先づその行掛りを明かにして、無斷で今までの約束を變へぬやうに努力する必要があるのである。ところが日本の新語利用者の間には、奇妙に言葉の外形に氣を取られて、その內容の推移を意としない癖があつて、それが近年は殊に甚だしくなつて居るらしいことは、後に列擧しようとする幾つかの例からも想像し得られる。方言といふ語の意味なども、近頃の事實である故に證明はごく容易だが、この三十年餘りの間に早よほど變化して居るのである。明治中期以後、主として矯正の目的を以て行はれた地方の調査には、殆ど例外無しに方言と訛語とを併記して居るのみならず、或は丁寧に一つ〳〵の地方語を、二つの種目に分屬せしめたものも稀でない。言葉が果して訛なるか否かの、さう簡單に決し得る問題でないことは無論である。中には一つの語の言ひそこなひと認められて居たもので、實は全く別起原のものもあらうし、これと反對に話者の意識に於て、我

土地ばかりの特殊なものと思つて居たのが、古い誤謬の殘形であつたといふ場合もあらう。經驗未熟の士が大膽に決行した分類には、遺憾が多いことは言ふにも及ばぬが、少くとも今の雜然たる各地の言語現象の中には、右にいふ二つの流れが入り交り、その水上の二つ異なる方角に在るらしいことを、認めて居たゞけは穩健である。恐らくはその以前からの學者の、「方言」に對する概念を承け繼いだものであらうと思ふ。自分の場合を例に取ることは有力で無いが、私なども早くから、方言は異なる單語、又異なる物の言ひ方を意味するものと心得、同じ語であり表現であるものを、聽き馴れぬ音調でいふだけがナマリだと思つて居た（ナマリが近世の新語たる「訛語」よりも狹いもので、後者には別に其以外の語法の訛と認むべきものをも含んで居たらしいことは、此頃になつて漸く心づいたのであるが、此點に於て訛語と對立した方言は、一部分却つて以前よりも範圍が縮小せられ、且つ又分界をやゝ不明にする結果になつたかと思ふ）。東北出身の人たちには、此けぢめは最も明かなやうだが、自分なども國を出て四十餘年、書くときには固より物を言ふ際にも、注意して小學讀本に無い單語、所謂東京中流の家庭とかで使はぬ文句は、口にせぬやうにして居るのであるが、何誰が聽いても生れ故郷を發見し得るやうな語音を發して居る。同じ言葉の音の出し方のちがひと、異なる言葉の存在とは別の事實であつたのである。方言といふ名詞を自分たちの慣用の通りに、後者に限つてもらふと便利は此上無いのだが、それが出來ない迄もこの部分の言語事實だけには、何か是非ともはつきりとした總稱が無くてはならぬ。さうで無いとかの一方の微妙なる音韻變化を外にして、別に言葉の生長と死歿との、獨立した法則を考へて見ようとする者が困るからである。ところが僅かに三十年足らずを隔てゝ再び興隆した地方調査では、方言といふ語はあらゆるナマリを含み、其上に單なる音抑揚をも是に打込んでしまつた。中部平野の鐵道沿線、諸國

來往の目まぐろしい大都市周圍の村などの、所謂標準語化の徹底した土地では、時によつては以前私などの方言と謂つて居たものを、一語も載せない方言集さへ出て居るのである。單語は分化して段々に精密になつて行くものかと思つて居ると、「方言」といふ語のみは逆に多面の意義を包括することになつたのである。文部省の國語調査委員會が、國語の地方的變化を觀察する事業を、公けに方言取調と稱し、次いで方言採集簿が全土に頒布せられるに及んで、この新らしい內容は略固定してしまつた。それには幾つかの理由があつたことは言ふ迄も無い。西洋の dialect といふ語にも對譯の簡單なものが入用であつたらうし、一つの機關によつて行はるゝ地方調査である以上は、是を總合した名稱も無くてはならなかつた。殊に訛語といふ名は穩かならぬ豫斷であつて、語弊を伴ひさうだから出來るなら避けた方がよかつた。他に適當なよい言葉が見付からぬとすれば、今後はその方言を弘い意味だけに、用ゐることにしようと決められたのも是非が無い。假に是非があつても今となつては、我々は是に遵はずには居れぬのである。唯將來に向つてまだ間に合ふことは、今日謂ふ所の方言の三通りの變化なるものは、三者別々に考へて行くことが今でもやはり便利であり、又必要でさへもあるといふことゝ、其中でも特に單語の地方差は、純なる言語學の立場からも、他と獨立に其素因を尋究すべきもので、從つて是に何等かの代りの名を、付與して置かねばならぬといふことである。感じは好くないが方言單語、もしくは狹義の方言と謂ふなども一案であらう。（私の講說は專らその狹義の方言の成立と交渉があるので、他に紛れる懸念の無い限り、暫らく簡便の爲に古い頃の意味に、方言といふ語を用ゐたいと思つて居る）。兎に角に我々の研究の對象とすべきものに、手頃な呼び名の無いことは御互ひに困ることであるから、折角持傳へた以前の語は尊重して、無闇にその中味を入れ替へぬ樣にしなければならぬ。最近の東條操氏は、もう一

度方言といふ語の範圍を擴大して、今度は土地土地に現に行はれる標準語までも、詰め込まうといふ企てがあるといふが、そんな事は是非とも願下げにしたい。標準語の浸潤は時々刻々に進んで居り、到底或一時點の狀態を切放して考察の用に供し難いのみならず、是と在來語との配合や比率を問題にする必要などは、如何なる矯正運動家も豫想しては居るまい。强ひて學問上の入用も無いところへ、この大切な用語を押し遣つてしまふのは、無くしてしまふのと同樣に惜しい。もしもたまさかにその標準語混入の狀態を、一語で言ひ現はす必要が生じたならば、是を地方語現象とか、地方言語事實とか謂つても臨時の用は足るのである。今ある廣義の方言なども、實はこの名で呼んで居てよかつたのである。何かよい語が有れば尙よいといふ迄で、三者を總括して研究の對象としなければならぬ樣な場合は、我々の知る限りではさう頻々とは起つて居ない。たゞ素人の多くの採集者が、迷つたゞけが落ちであつた。

四　訛語の種別

方言といふ語の範圍の、次第に擴張したがる傾向には、又一つ別の原因もあるかと思ふ。方言の意識は、最初先づ外から來た人の胸に萌すべきものであつて、各地住民の自身日常に使用する所の言語が、その所謂方言であることを知るには、更に第二次の修得を必要とするのであつた。ところが近頃の採集事業には、經驗ある專門家を働かしめる場合は極めて少く、却つて餘り世間に觸れない地元の話主をして、直接にその現實の用語を自記せしめようとしたのである。何が方言であるかの疑問が提出せられるのは自然である。是に對する指導者の答は、親切と謂つてよいか否かを私は知らない。小學讀本はやゝ口語に似たる文語である。是と同型なる言葉を話して居る者は、東京の眞中にだつて一人も有りはすまい。所謂中流の家庭のまじりの無い標準語を話すものは、搜したら何處かに有るのかも知れぬが、それを地方に居てどうして知ることが出來る。もしも是と異なるものが皆方言だと答へたな

らば、結局各人は讀本などに依つて、めい〳〵の想像上の標準語を作り上げ、いつ迄たつても自分ぎめの方言を、盛り澤山に提供せざれば已まぬわけである。我々の標準語は時々刻々に成長し、且つ又批評せられ補訂せらるべきものである。假にもう少し把へ處のある場合でも、尙是を尺度にすることは鴉の黑雲を目あてとする喩へに近い。ましてや今日の方言採集者に、それを知らせる方法は少しでも具はつて居ないのである。いつそのこと何もかも草苅式に苅り集めさせて、こちらで仕別けをしようといふ一案を、案出する人が現はれるのも已むを得ない。それならば必要の資料の逸脱する懸念は先づ無いかも知らぬが、その代りには方言が如何にして出來たかといふ根本の問題を、解決することが一段と困難になるであらう。

然らば何によつて地方の言葉の、採集すべきものと否とを判別したらよいか。是は私たちにはさう苦しい詰問では無い。大よそ採集者の力量次第、是が方言であらうと思はれるものを採ればよいので、それの選定が屢〻當を失する者は、乃ち適任で無いのだから止めるのが最も簡便だと思ふが、假に熱情が有つて是非續けるといふならば、せめては日本の至つて普通の辭典に、載せてある語だけは方言として報告せぬことを約束せしめたら、それでもう十分であらう。今日公刊せられて居る大きな字引には、隨分餘計な國語ともいへないもの迄も網羅して居るが、方言だけは擧げぬと言明し、もしくは古い增補俚言集覧の如く、何れの地の方言といふことを明示して錄して居る。これ等に出て居る言葉を又出すのは詮も無いことであり、それに洩れて居るやうなら兎に角に新らしい知識である。たとへ方言では無くとも之を保存するは意義があり、又問題とするに足るのである。しかも實際はその大部分が、我々の求めて居る方言であらうと思ふ。だから採集者の實用的定義としては、日本で最も完全と自稱する辭典に、未だ載せられて居

い言葉が方言だと、明言して置いても格別の誤りは無く、且つ不穿鑿なる採集者を戒めることが出來るのである。斯う言つてしまふと必ず第二の不審として、それではあんまり又廣過ぎはしないかといふ說が出よう。鼹鼠を土地によつてウグラモチ、乃至はオゴロモチ・イグラモチと謂はうとも、それがムグラモチの變化なることは誰でも知つて居る。百合は北國へ行くとルリ・ロレン、ドレンと謂ふものさへ時々はある。家の引移りはヤウツリであらうが、京阪は專らヤオツリと謂ひ、紀州の南岸に行くとユアタリともユワタリとも謂つて居る。その他戶棚をトナダ、茶釜をチヤマガ、釣瓶と書く語をツブレと呼ぶの類、一々是を取上げたら際限も無く、又方言の範圍がほやけるといふ人があらう。それは正に其通りであるが、今日は實際さうやつて居り、是を刪除したら消えてしまふ方言集も、中央部には可なり多いのである。何と言つても方言集は辭典である。それを此樣な亂雜なものにしたのは、起りは近年の定義擴張と、之に伴ふべき分類の怠慢、一つの手帖を以て三種以上の現象を、寫してしまはせようとした性急に坐する。三十年前の小學教育者が、矯正の事業を樂觀したのは失敗だつたが、それは彼等ばかりの大膽では無い。寧ろ推服してよいのは訛語と方言を對立せしめ、何れは双方とも撲滅させて然るべきものだが、其間に若干の緩急あることを、意識して居たらしい態度である。然るに結果はどうなつたかといふと、單語の統一は先づ行はれ、所謂訛語の習性となつたものは後に殘つた。ちやうど豫想とあべこべの事態を招致したのは、言はゞこの二つの現象に、二通りの法則の行はれて居るかも知れぬことを忘れた爲である。其位の不注意ならば今でも尙やつて居る。といふよりも今の方が甚だしい。單語は新らしいものゝ出現が歡迎せられ、少しく古くなるとわざと別の語を發明しても、之を取替へる。新語を考案する技能は日本人は殊に長じて居る。教員が努力せずとも惡い言葉まで覺えて來る。それとは反對に自分で

は意識せず、又一同が是で世間並の如く思つて居る物の言ひ方は、よほど教へ込まぬと其差異を認めさせ難く、又始終そんな點に注意を拂つて居れば外國語と同じで、言語の自然の利用は出來なくなる。故に殆ど例外無しに、此分だけが後に殘るのである。訛とか正とかいふ語の意義の穿鑿は私は爰ではしない。單に一定の地方的異同として此語を解するならば、その國內統一を阻碍した事情は、寧ろ双方又は一方の同語意識に在つたのである。私の考へて見ようとする狹義の方言には、最初からそんな意識は絕無である故に、採らうか採るまいかの決斷はすぐに必要になる。さうして我々は又可なり新しい語の眞似は好きである。之に反して訛語は少くとも話者によつて、稀にしかその相異を氣づかれて居ない。即ちロウソクだからドウソクと謂ふのに何が惡いと思ひ、茄子といふ積りで梨子に近い音を發するのである。普通の會話は達意を目的として居る。一人で違つた訛語の中へ飛込めば、逆に此方が笑はれる恐れさへあつた。假に誤解をした所で其責は先づ旅人が負はされる。ましてや話はよく判つて居るのに、其言ひ方がよくないなどと、中央集權時代の役人の如き批難をする力は外來人には無かつた。だから追々にそれが固まつて、各地割據の通例を改め難くなつたのである。訛語と方言の差別は歷史的にもよく立つて居る。前者は即ち同じ一つの言葉の、外から來た者にはよく認められる言ひ方のちがひであり、後者は通辯を要する知らぬ語であつたのである。是を混同して考へて居る限りは、地方語の起りなどは答へやうが無いかも知れない。

　訛語は元來客觀に基く名であつた。外から聽く者には之を指示することが甚だ容易であるに反し、內に住する人々に取つては、往々にして其範圍を決し難かつたのは、それが差別の新たなる發覺を前提とし、私の謂ふ同語意識の破壞を意味したからである。其結果は最も古文獻を尊重し、同時に是と些かの聯絡も無い都市の語辭に對しても、十分

に從順であつた人たちまでが、尙折々は改むべき土語を取殘すのみならず、更に他の一方には方言も亦一種の訛語に過ぎぬかの如き、匆卒なる類推をする場合が多かつたのである。難波のアシが伊勢のハマヲギであることは、寧ろ京人の興味を以て聽く所、一つの事物には是非とも唯一つの單語だけで無いと、記憶に苦しむなどゝ謂つた人は一人も無く、又カボチヤが正であつてナンキンが訛、カモウリはうそでトウガンが本當などゝ、斷定した者も曾て無かつたのである。それを大急ぎで片一方を引込ませ、中には頃合の對譯も無い方言まで、廢して使はぬことにしたのは、如何に地方の人が差別の撤却に熱心であつたかを證明はするが、御蔭で我邦は一段と語彙の貧弱な國になりかゝつて居る。新語の無差別に補給せらるゝ所以である。方言の範圍の改めて考察せらるべきは申すに及ばず、更に前年の訛語と認められたものゝ中でも、元に溯つて何故に訛であつたかを見分ける必要が多い樣に思ふ。

五　同語意識の崩壞

前にも言ふ通り、我々の訛語の概念には、最初から單なる音韻現象以外のものを含んで居た。例へば九州で黑いを黑かといひ、受けるを受くるといふ類の變化も、本の語はちやんと判つて居て、たま〳〵是を表出する語音の變つて居る點は同じである故に、人は均しなみに是をも國なまりの中に加へようとしたらしいのである。一方を假りに音訛と謂ふとすれば、こちらは用訛とも語法訛とも名付くべきもので、古人必ずしもこの二者を混同したのでもあるまいが、外部の觀測者の耳に響く感じが似て居た爲に、一語で總括してもよいと思つたのであらう。斯うなつて來ると、愈々正訛の論はやかましくならねばならぬ。殊に音韻の如くどこかに古音が保存せられて居る如き想像も成立たず、況んや京音が必ず純といふ豫斷も許されず、兎に角中代以前の若干の記錄があつて、双方の共に既に改まつて居ることが證據立てられる以上は、少しでも元の形に近い方がより正しいといふ說も起り得べく、

便宜一點張りの標準語の足元は、一段とたど〳〵しくなるわけだが、私は斯んな實際問題には干與したくない。それよりも考へて見なければならぬことは、同じく訛語と目せられたものゝ中でも、是は原因が全く音韻の變化とは異なつて、寧ろ方言單語と共生成の法則を、共にする點がありはせぬかといふことである。形容詞や動詞には時の需要に應じ、人の才覺を以て、新たに調達せられたものが隨分多いと同時に、特に計畫を以て從來の用法を更訂し、乃至はこれを保持しようとしたものが少くない樣に思はれる。かつて我々が一つの語に習熟して、自由に色々と是を用ゐて居る間に、何か隱れた理由で其中の一つ二つが、格別に土地の嗜好に叶うて盛んに流行し、次第に同類を揃へて他の型を排除したといふやうなことが、現在の語法の地方差を、作り上げた一つの原因では無かつたらうか。もしも文法家の曾て考へたやうに、一つの心持を表はす用語法は唯一つで、是に依らないものは皆まちがひであつたとしたら、斯ういふ變化は起りやうが無いのである。數多い實例は又我々の眼の前にも在る。年とつた人たちの首を傾ける物言ひが、幾つか流行して大半はやがて消え、殘りの印象の特に好いものが、兒女の口にも上ると家々に根を生やして、彼等の成長と共にいつと無く、次の代の當然となつてしまふ。此點は個々の新語ともよく似て居り、音韻の變化とは可なり著しく異なつて居るのである。

但し所謂音訛の方面に於ても、これと同じ傾向は全く無いわけでは無い。以前「音訛事象の考察」といふ論文に於て、多くの蟲の名に就いて述べて見たこともあるが、人の新意匠は時あつて音の變更の上にも加はつて居り、それが又選擇によつて受容せられて居る。或時は語意の分化に伴ふ差別の必要から、又或時は單なる音聲の興味から、わざわざ古いものを罷めて新らしいものに就き、又は强ひて特徴の多いものに赴かうとして居る。それを悉く生理學上の

現象と見、古風墨守の不成功の如く解することは、よほど無理な音韻變化の法則を、築き上げさせる結果になりさうである。この實例として自分の引用した中部地方の桑の實の方言などは、或はまだ十分に適切なもので無かつたかも知れぬが(方言二卷一號參照)、少くとも多くの類型的なる自然音訛と對立して、別に一種の孤立的、卽ち他の一般の傾向と伴はない、特殊の變り方の有ることだけは認められる。それが土地毎の流行であり、又數あるものゝ中からの選擇であるとすれば、爰にも語法推移の場合と同樣に、やはり第二の人爲音訛、もしくは社會的音訛とも名付くべきものの存在を疑ふわけには行かぬのである。

訛語と我々が今まで呼んで居たものゝ中に、音と用法との二通りの變化があつたことを、是非とも明瞭にしてからで無いと、この總稱を存置することが危險である樣に、その二通りの變化の各〻にも、更に二つ以上の全く異なる原因が入り交つて働いて居なかつたかどうかは、やはり豫め之を確かめる必要がある。それを怠つての概括的歸納は、價値が乏しいばかりか有害でさへあると思ふ。しかし此點を詳しく論ずる爲には、今は適當なる機會で無い。私が力を專らにしなければならぬのは、訛語と方言との分界の不明、或者は殆ど全部の地方語を片端から誤謬と見て僅か殘つて居る文獻資料を以て悉く之を證明しようとし、他の或者は是と逆に、兒女の言ひそこない迄を皆別の單語と認めて、麗々と之を五十音順に竝べて置かなければ承知せぬといふ樣な、兩種極端の方言集の、共に方言集として珍重せられる狀態が、どういふ風にすれば整理し得られるかといふ問題であつて、是には前に述べた樣な種別觀察を、全然閑却することが出來なかつただけである。音韻の地方差には、自然變異の法則が既に認められ、それが又實際に發音の意識的なる改革を牽制する力も相應に著しいのであるが、他の所謂語法訛の方面に在つては、本來どれ程迄の無意

識の轉向を許し得るものであつたかもまだ究められて居らず、從うて一見稍無方針なる各地の言ひ換へが、自由に續けられて居たかの如き感じを與へる。無論さういふことは有り得べきもので無く、苟くもそれが社會の必要であり、又取捨の結果であるからには、背後には必ず之を統制する法則の、未だ人間の會得に入らぬものが、潜んで存在すると見なければならぬのだが、其發見の爲にも方法は尙盡されて居ない。言語利用の樣式の次々に移り動くと共に、之を改良して來た前代の動機と經路は忘却せられ、いつと無く私の謂ふ同語意識を失つて、異なる單語のやうに解せられたものが、特に此部分に多いのは當然の結果である。方言生成の起原を考へて見ようとする者が、最初に先づ訛語との交渉に留意しなければならぬのも此爲である。個々の實例には假に異論を唱へる人があらうとも、兎に角にこの同語意識の崩壞によつて、分立した方言が若干は有ることを、認めた上で無いと新語論は說けないのである。音轉訛の場合は大抵は過程が明白で、之を別語と見る程の開きがあるものは尠ないのだが、それでも時には好みや必要によつて、意外な形にまで言ひかへて居るものがある。元を忘れてしまへばそんなのも方言であるが、是は寧ろ將來利用せらるべき音韻論の新資料で、我々は唯之を誘致した底の動機は、どれだけ迄新語の製作、もしくは語法の選擇と共通したものがあるかを、討究して見ればよいのである。

以上が無調法ながら此篇の序論見たやうなものである。もう一度手輕に要約すると、方言といふ語の範圍を、言語の地方差の全部の如く解せられることも、今は早致し方は無い。しかしもしも地方差の起原を明らかにするが學問ならば、所謂三つの部門は分別せられなければならぬ。是を混淆の狀に置いては目的は達しない。次に三つの中で先づ單語の變化を考へて見るのは、必然の順序である。現在の資料は此部分のみ稍採集せられて居るだけで、他の二つの

問題は尙甚だしく不完全だからである。是に關してはそれぞ〵の採集法、又それぞ〵の整理比較の方法があるべきであるのに、今はまだ物の序に、僅かに事實の片端をしか把へて居らぬからである。事實に據らない推理といふものは私たちには出來ない。出來ると信ずる人に遣らせて見るの他は無いのである。但し今日わかつて居るだけでも、二種の所謂訛語の原因に、各〻二つの場合があることは察せられる。さうして其一方の社會人の發意により、特に意識して變更し又は保存しようとしたものだけが、狹義の方言と交渉が有るらしく思はれる。といふわけは其若干は訛語の群から離れて、既に異なる單語の如く看做されて居るからである。訛語といふ字の用法に就いては、私は責任を負はない。事實を記述する學問には、素より正訛の問題は無いからである。

〔註〕人の選擇に基づく特殊の用語法が、動機不明に歸して一箇の新語の如くなつた例は、動詞には最も多いが、形容詞にも幾つか見つけられて居る。イシイは多分イミジの音訛だらうが、食物に限つて特に敬語を附した女性の用法は、今ではオイシイとなつて美味のものを意味する一語である。東北諸縣で「幾分か」又は「或程度まで」を意味するモサバは、「申さば」といふ古風な句形の名殘である。音韻の方でも本文のユワタリなどは一つの例だが、紀州の南部で「くちなし」をサンビキ、又他の郡でサンヒチともサンシチとも謂ふから、元は山梔子の字音の變化であつた。是と反對に美濃飛驒などで、「庭たゝき」をセキリンと謂ふのは、後に鶺鴒の音に近づけようとしたゞけで、他にシキリン・シチリン・チチンドリなどの例もあるから、元は啼聲の方からの推移であつた。是と同樣に蟷螂をトウロウといふのも、ヲガミタラウ・ヲガマナトホサンなどの例を比べて行くと、此蟲の擧動の拜むに似た所から、附けた名が元である。

六　古語保留

方言に昔の言葉が殘るといふことは、既に南留別志の頃からの好話題であつた。玉勝間の有名な

一章には、親切にその觀察の態度を說いて、是が國語の研究の上に缺くべからざる修養であるとさへ訓へられて居る。是は誠に感謝すべき啓發であり、又廣汎なる眞實でもあつた。今日の地方の學徒が、各自の鄕談の中に古事記萬葉集の破片を見出して狂喜するのも、本居大人の手引といふことが出來るのであるが、單にその新舊の比較を古文獻の上に限つて居ただけでは、本當はまだ言語史の事業でも無かつたのである。個々の單語が千年二千年の昔から、用ゐ馴らされた日本語であることは、書物に出て居ればそれでもう疑ひは無い。それには色々と辭典も出來て居て、わざわざ知る爲に地方語を探るにも及ばぬわけである。我々の疑問は尙この以外に、不幸にして現存の記錄文語に、一度も採用せられなかつた言葉が、どの位有つたらうかといふことが一つ、第二にはさばかり由緒のある前代日本語の或部分が全く影を斂め、又は都府の生活から退いて僅かに片隅に零落の姿を留め、今更之を珍しがる人たちの話を、默つて拜聽しなければならぬのは何故か。普通の考へでは殘つて居るのが當りまへで、それが稀だといふ方が寧ろ不思議なのである。この第二の疑問を釋く爲に、我々の新語論は乃ち入用であつた。日本語の語彙は今とても決して豐富ならず、新しい經驗はいつも敍述の器物を溢れ、「言ふに言はれぬ」情感ばかりが、日ましに複雜になつて、どんな粗末な表現のし方でも、誰かゞきつと眞似するといふ世の中に、どうして斯う惜しげも無く古いものは棄てゝ來たか。新規に發明する力は別のもので、之を保存の方向に轉用することが出來なかつたか。乃至は其餘勢に卷添へを喰つて、消えずともよい古語までが追拂はれてしまふことになつたか。これ等の諸點を考へて見る爲にも、やはり新語の出現といふ側から、近よつて行くのが便利である。古語と新語との實際上の堺目は、時を以て劃することも出來ず、文書の初見を以て目標とすることも尙心もと無い。昨日以前から有る我々の古語といふものは、或はその全部が太古以來

の、何れの時代かの新語であつたかも知れぬのである。今まで思ひも付かなかつた別の名や言ひ方を新たに考へ出して世に行ふ技能なり必要なりが、不意に中途から起るもので無く、又人類と相生であつたといふ言葉が、どれであるかを證出することは容易でないとすると、古語は唯單に第二のものが生れて來て、取つて代らうとして未だ果さない僅かな期間だけに、存立し得る名稱だと言つてもよいのであるが、さういふ風には通例は考へられて居ない。現在世にある言葉を大まかに二つに分けて、一度でも筆紙に上つたものは、反對の證據の無い限り古くから傳はつて居るやうに、其他は何れも皆近頃になつて始まつた樣に、見ようとする風が今まではあつた。それが條理の無い差別であることは、自然に少しづゝ判りかけて來ては居るが、さて何人にも納得の行くだけに、解説しようとすると其方法がまだ具はつて居ない。我々は先づ之を見つけなければならぬのである。現代の新語は共通の經驗で、その出現の過程を觀測する者も多く、又計畫すれば實驗さへも不可能でなかつたに反して、過去は單なる痕跡の群であり、從うて又推察の領分に屬する。果して今日の通りの需要の複雜性と、種々なる樣式の配合とを以て、昔も其新語を產み育てゝ居たかといふと、寧ろ然りとは答へ得ないので、しかも時代々々の傾向なり流義なりは、さう簡單には把捉し難いのが當然である。たゞ我々の賴りとしてよいことは、第一には一つの國民の曾て具へて居た能力の持傳へ、第二にはその能力の發揮を要求する外部の事情の繼續、之を具體的にいふと、日本人は恐らく昔から言葉造りが巧者で、同時にその新語の入用が、絶えず斯邦には大きかつたらしきことである。十分なる證例の出揃はぬ前に、斷定を下すことは固より不可であるが、兎に角自分等は現在の最も複雜なる現象の中に、若干の過去にもあつたものが、今尚包含せられて居ることを豫想して、是から出發すれば歴代の新語も、次第に起りが判つて來るものと樂觀して居るのである。新

語論の完成は一國言語史の全幅に及び得る。斯くして始めて純粹の古語、卽ち民族と共存立の初端を等しうする言葉を取分けて、之を安全なる異國語間の比較にも援用し得るわけであつて、多分古からうといふ近頃の推測には、ノシを波斯語だといふ類の笑ふべき誤りが多いのも、この準備の硏究を無視した性急に災ひされて居るのである。

斯ういふ心持を以て、私は古語保留といふ言葉を使つて居る。是が絕對の古語だといふことは、まだ何人も言ひ切ることは出來ないだらうが、兎に角に可なり久しい間、次の新語によつて更迭せられなかつた語が、所謂俚言の中にも相應にあるのである。或は寧ろ地方の現象であるが爲に、特に注意せられるのかも知れない。多く古樣を存するのは文語であり、是と最も親しい都市語である筈なのに、其方は旣に改まつて鄙にのみそれが殘るといふことは、先入感ある人々には珍しかつたであらうが、もし是をたゞ單なる新語不發生の狀態として見るならば、少しでも奇妙な事實では無い。何となれば新語は昔も今も、言語活用の活潑なる、卽ち人間の多い土地に起り易かつたからである。古語を一度でも古文獻の上に現はれたものだけに限るならば、それは田舍の方には多く殘らなかつたかも知れぬが、誰が其以外に昔の日本語が、もう無いといふことを斷言し得よう。方言の調査のさし當りの功德は、寧ろさういふ咎かしい俗念から、御互ひを救ひ出すことに在つたのである。我々は努めて手近なる多くのよい例を、早く見つけて無益の論を省かなければならぬのだが、今はまだ同志が割據して、僅かな比較をさへ試みようとして居ない。其爲にいと容易な發明までが阻まれて居るのである。私の家の軒先に、今漸く芽を出さうとして居るアケビといふ植物は、倭名鈔の時代から旣に阿介比であつて、是と異なる各地の呼び方は、すべて訛音として卑しまれて居た。東京の近郊から中部地方へかけては廣くアクビと謂ひ、關東の村方には下總香取などの如く、アツクリといふ處も多いやうだが、是

は其果實が口を開けて居る故に、斯ういふ方が適切だと思つたものらしい。アキビ・アキベといふ地方でも、無論大急ぎで矯正しようとして居るやうだが、一昨年私が隱岐に行つて採集して來た所によると、あの島の方音にはアキベとアキンベとがあり、是に對して今一種の木通をフユンベと謂つて居る。さうして其果實の成熟は幾分か一方が早いさうだから、此語の起りの「秋むべ」であつたことがよく判る。古語は却つて邊隅に於て保留せられて居たのである。山慈姑のカタクリは東北は一般にカタコで、此方が標準語よりも今一歩、古形の「かたかご」に近いことは認められて居るのだが、信州の川中島附近では、今でも方言が明晰にカタコユリであつて、都府のカタクリが却つて其音訛であつたことを知る。是なども關東のアクビ・アツクリと同じやうに、次の聯想のクリといふ意味が働いて、一つの言ひちがへを固定せしめて居るので、單なる音韻の現象ではなかつたのである。侏儒を一寸法師といふことは或時代の戲語で、多分は今ある同名の御伽草子と前後して生れたものと思ふが、其以前の古語のチイサコ又はチッサコであつたことは、仙臺の方言集濱荻によつて窺はれる。江戸には近頃まで「ちいちや子ぼつちや」の童謠が行はれて居て、嬉遊笑覽の著者の博識を以てするも、其本意はもう解らなかつた。しかも桃太郎同系の神子出現譚が、遠く小子部連栖輕の物語以前から、既にわが邦に存在したらしいことは、この唯一つの語の發見によつて、略明かになつて來たのである（民族三卷四號參照）。九州では墓をタンギャクといふのが古語であることは早くから注意せられて居る。紀州は熊野にもタンゴクといふ形があつて、是は先づ疑ひが無いらしいが、最近に沖繩語の採集が始まつて、同種の例は更に急激に增加しようとして居る。伊波氏が引用せられた錐をイリといふ語なども、分布は九州の南半に及んで居る。射だの彫だのに該當するイル・エルと同原のイリが以前の形で、キリは更にそれから導かれた上代の新語であつたのであ

る。その他標準語のナミダに對するナダ又はメナダ、地べたのベタに對するミザ、慌だしくを意味するアタダニの如き、何れも其分布は南方の一隅に偏せず、八丈とか佐渡とか山陰の田舍とかのやうに、懸離れた土地に於ても至つて謙遜なる存在を保つて居た。平心に之を比照すれば、我々はその變化の順序を知るに苦しまない。單に中央の詞客の國語を改良せんとした努力を見縊り、彼等をたゞ單なる舊式墨守者と見て居た人々だけが、いつ迄も古語の文獻以外に傳つて居ることを、覺ることが出來なかつたのである。

七　複合保存の例

新語作成は一つの技術であつた故に、他の多くの技術も同じやうに、やはり都市に於てその特殊の發達を見たものかと思はれる。田舍の弱點は第一に新語の需要が少く、第二にはこれを鑑賞批判し又採擇支持するの力が十分でなかつた。方言は今日その稀有なる仕事の跡として珍重せられるが、他の主要なる部分は標準語の中に於て、却つて最も目立たずに爲し遂げられて居たのである。村の役目は昔も今の如く、新たに生れたものゝ模倣であり、次には其保管であつた。是が寧ろ我々の言語史研究に、利用せらるべき大切な資料で、新語はたゞ中央に久しく繰返されて居た事業が、爰にも其一端を反映して居たに過ぎぬのである。地方の言葉の中には忘れ殘り、即ち既に變更せらるべくして、何と無く其儘になつて居るものが中々多い。キヌが絹絲や絹織物を意味するやうになつてから、衣服をキヌといふ語は廢語となり、沖繩諸島を除けば一般に、キモノかキルモンかゞ是に代用せられて居る。ところが他の語と複合して、何か特定の物を意味する場合だけは、別に不便も無い限り在來の名前を續けて用ゐて別に氣にしても居ない。たとへば蛇のぬけがらを富山地方で、ヘーブノキンといふなどは古語である。北陸一帶に衣服を入れて置く一種の箱を、キンビツ・キンベツといふのも衣櫃であるが、土地によつてはタンスといふ新語を拒んで、

是をさへ同じ名で呼んで居る者がある。農家に缺くべからざる衣裳掛けの竹竿には、全國殆ど一樣にナラシといふ新語が普及して居るにも拘らず、九州の島々にはそれを知りつゝ、尙キンカケザホの語を併用して居る例もあるのである。更へずにすむものなら更へずに居ようとする傾きは、農民の間には可なり著しい。町では單語の氣持なり素性なりを、幾らか餘分に注意して居たと見えて、此種の新舊不一致は或程度まで整理してある。たとへば天然痘をホウソウと稱して、モガサもしくはモと謂はなくなつて後も、アセモといふ語だけは尙殘つて居るが、是も現在はアセボと謂はうとする者が多くなつた。是に反して九州にはたしか水痘をソラモといふ語があり、福島縣の海岸地方には、疱瘡神送りをモナガシといふ名が行はれて居るのみならず、痘痕のアバタをモガサ・モクソ、或はイモグシなどゝ間違へて呼んで居る土地も多い。薪をコルといふ動詞が廢せられると、キコリといふ音の佳なる名詞までが、僅かに文語の中に保存せられるだけになつたが、今も山陰の諸國などでは正月二日の山入の行事を、ロ言葉でもコリゾメと謂ふのである。炬火をタヒと謂つたのは既に歷史であつて、松明のタヒマツすら既に燒松の音便と解せられて居る(言海)。にも拘らず、盆の魂祭に焚くものはタヒであり、乃ち百八タヒといふ語は弘く中部の諸縣に分布する。魚をナと謂つたのは、酒の肴といふ場合だけに殘つて居るが、それさへも野菜の菜だなどと謂つて、我々の酒宴に必ず鮓を用ゐた風習を、忘れてしまふ迄になつて居るのだが、地方の複合語詞の中には魚を納るゝ屋をナヤ・ナゴヤ、魚を乾す裝置をナダナと謂ひ、魚群をナブラともナムラともいふ名が殘り、天龍川の流域では川をしきつて魚を捕る漁法に、ナツボといふ名稱も尙用ゐられて居る。古い記錄に見えて居る單語だけは、斯うして竝べて行けば何人も其存留を認めるであらうが、是が記錄にある語だから殘つたので無い以上、記錄を逸した古語で亦同じことがあつたと見なければな

らぬ。それを念頭に置かずに、方言の起りを說くのは誤りである。物の楕圓形なるをイビツナリといふことは、是も亦飯櫃（いびつ）といふ古語の複合保存であるが、今日のめし櫃はメンパ・ワツパを除くの他、もはや楕圓のものは見られなくなつて居り、從つて語原の異なる解釋も成立ち得るか知らぬが、是を中國のどこかでは、今でもユリナリと謂つて居て、此方が又一つ古かつたのである。ユリと稱する楕圓形の器物を、現在まだ用ゐて居る土地はごく僅かだが、是を記憶する老人は幾らも居る。名の起りは多分穀粒を淘（ゆ）り汰（よな）げる用途からであらうが、主としては食物を田人に餉（おく）る爲に、頭に載せて運ぶ目的に供せられ、壹岐島などでは更に之を神祭りの具として居て、百合若說話の主人公の名前までが、其根源を是に溯らしめるのである。それは又一つの決し難い問題だとしても、兎に角にユリといふ重要な一つの物の名が消えて、ユリナリといふ複合形のみが地方にはあつた。それを矯正してイビツナリとすることは、改良にもならず又復古にもならない。細くて長い一本の木材をボウといふ語と、ボクといふ語とは現今は別ものと考へられて居る。前者は棒の音、後者は古木の音の半略のやうに、多くの物知りたちは心得て居るが、そんな用法は二つとも原產國には無い。子供が手遊びにする木切れをボクトといふなども、人は木刀かと思つて居るが、少しでも刀では無い。これ等の混亂はホコといふ古い日本語が、單に鉾や矛だけを意味するやうになつて、其他を忘れてしまつた結果らしいが、所謂木のボウの元ホコであつた名殘は、屋根葺きの用語にも複合して殘つて居る。たとへば屋根の萱を押へる木は、どこの田舍に行つてもオシボクであり又はスマボコ等である。それから運搬用の朸もオホコらしい。是を天秤棒などゝ謂ふことになつたのは、所謂兩天秤に擔ぐやうになつてからの話で、さういふ擔ぎ方は以前には無かつた。椋と字にかく木を現在はムク、是なども一つの分化かと思ふ（エノキにも古くは朴の字が宛てゝあるが、やはり

ボクに近い別名があつた爲かも知れない）。椋は今でも棒を作る木として知られて居る」それは必ずしも此木が強いからで無く、何か信仰上の習はしに基づいたものらしいのである。

〔註〕キヌビッといふ語は、源氏の松風に出て居ることが、和訓栞の増補にも注意してある。ヘビノキンといふ語は富山近在だけでない。加賀河北郡の方言としても採集せられて居る。

八　限定保存と意義分化

新語の流布にも折々は無意識のものがあつたと同時に、古語の保留にも亦時として、我々の計畫に基づくものがあつた。是も方言の發生を說く場合に、一應は觸れて置かねばならぬ問題である。古語が複合によつて殘る例の中に、椀をゴキと謂つた痕跡などは、知つて居る人も多からう。ゴキは御器とも合器とも書いてあつて、轆轤で木を剞つて造つたものは皆ゴキだつたらうが、主として飯椀をさして居たと見えて、それが陶器の茶椀に改まつた頃を境に、追々にその語は不用に歸して、今殘つて居るのは豉蟲即ち水すましのゴキアラヒ、又は油蟲のゴキカブリもしくはゴキコブリ等、複合保留をそちこちに現じて居る他に、今一つは犬猫の食器の名となつて居る。最初はそれ〴〵犬のゴキ、又は猫のゴキとも謂つたらしく、今でもさう謂ふ土地も少しはあるが、外に紛れやうが無いから、大抵は只ゴキとのみ呼んで居る。以前はさしも重要だつた我々の日常語が、僅かに餘喘を一隅に保つて居る例である。犬猫の食器の名に氣を付けて見ると、他にもう一つヅキといふ語があつて、中部地方の山村には可なり弘く分布して居る。ヅキは日本人の飯椀が木のゴキに改まる以前、普通に用ゐられて居たツキ（坏）といふ語の名殘らしい。卽ち單語も亦其食器それ自らと同樣に、古く且つ不用になると之を家畜に與へたのみならず、わざと少しばかり其音をかへて、高坏其他の淸淨なものと、同一視せられない用心をしたのである。其樣にまでして尙古い語を遣

からとしたことは、可なり新語の好きな日本人にも似合はぬやうだが、犬や猫などの爲に一語を新調することは、何だか奢りの沙汰のやうに古人は考へたのかも知れぬ。實際新語は其程度に、重々しく考へられて居た人間の行爲であつたのである。餘り上品な類例で無いが、梅毒をカサと謂つた事情も是とよく似て居る。カサは古語としては一切のデキモノ、即ち皮膚の病を總括して居た。始めてこの性病が日本へ來た頃には、是に假想の原産地名を被らせて、他の種のカサと區別して居たらしい。琉球ではナンバンフェガサ、このフェガサのフェは不明であるが、近畿中國では今でもヘエ又はヒェ、東北でも秋田縣などはフェボもしくはヘボである。それを言はない地方では、肥前五島がナンバンガサ、壹岐はナンバであり種子島寶島はナンバンであつて、是では京阪の玉蜀黍と同じになる。九州南部にはランガサともいふが、別にトモといふ新語も案出せられて居る。是と同じ語の流布かと思ふのは、福井石川から富山の一部にかけて、トンコ又はトンコカキで、トモは土地によつてトモヤミと謂つて居るから、疑ひも無く男女の共に病むといふ此瘡の特徴に依つて、新たに作り出した單語であつたのである。他の多くの地方では、それ迄の手數を是に掛けようとはしなかつた。惡い病の患者に對して昔からしたやうに、爰でもカサといふ一語を置き去りにして、一同は他へ立退いてしまつたのである。

カサといふ古語には、現在はもう他の意味は無くなつてしまつて居る。自分は此現象を古語の限定保存と名付けんとして居るのである。ツキが濁音にかへられて犬猫ばかりの食器の名となつたのも、亦此例に算へてよいのだが、是には尙タカツキ・サカヅキなどの複合形が殘つて居り、從うて故意の手入れによつて、差別を明かにする必要があつた。それを私は又意義の分化と言はうとするのである。カサといふ語の原形は、もう一つ古い所まで辿り得られる。

その一つはクサであつて、是を一種の皮膚病の名に用ゐて居る地方と、更にそれよりも廣い意味に解して居る處とがある。九州の殆ど全島に亘つて、クサフルフといふのは何か外部の邪氣に觸れて、病魔に取附かれたと感ずる場合のことで、壹岐の島あたりで春先草の芽の出る頃、不意に煩ひ出す病氣のやうに解するのは、恐らくはクサといふ語の後の聯想で、本來は單に怖るべきもの忌むべきものの總稱であつたやうに思ふ。節用集以來のこぢつけによつて、今日草臥などと書くクタビレルの動詞なども、右のクサフルフの音訛であつて、此語の領域は曾てはもつと廣かつた。カサも恐らくは此クサから分出したのである。次に今一つコセ又はコシといふ語がある。是も地方によつては色々のカセル病を包含し、又他の土地ではドスともナリともいふ最惡の皮膚病に限定して保存して居る。九州の南部では是をコシキといふ。此語がカタヰといふ語と共に、癩人と乞丐人とを兼ね呼んで居たことは、既に先輩も之を説いて居る。斯ういふ特殊な病者などを意味する語は、古來何處でも限定せられ、又分化して行かずには居られなかつたのである。しかしさういふ場合で無くとも、古語は必要のあるたびに分化し、同時に在來形の用途を局限しようとして居る。つまりは新語を作らずに濟ませようとする努力である。蠟燭は最初の輸入の際の日本名がラッソク又はラッチョク、それを中國の或山村などでは、古くから用ゐられて居る松脂蠟燭、卽ち耽奇漫錄などに畫かれて居るヤニアカシの方に委讓して、蠟で作つた改良品のみに、新らしいロウソクの稱呼を適用して居る。是などは思慮ある分配であつて、單なる自然音訛では決して無い。ツムジといふ古語は土地によつて、今では色々の物に限定せられて居る。標準語では馬や人間の頭の旋毛、又旋風をツムジカゼといふ語もあるが、信州松本などには四つ辻をヨツツムジ、卽ち道のツジも元來はツムジであつたのである。四通八達といふ語とはちようど向ふ前に、幾つかの線の集合する一點が以前は

すべてツムジであつたのを、少しづゝ謂ひ分けて行く必要があつたのである。武藏の水田地方で耕地の小區劃、京都の町のまん中で小巷を、共にヅシといふなども、音は僅かばかり改めてあるが、起りは何れも皆道の辻のツムジから出て居ると思ふ。それはまだ問題だとしても、他にも同じやうな例は有るので、たとへば山の頂上はツジとはつきり謂ひ、農家の厩などの上を物置にしたのは、特にツシと澄んで呼ぶことになつて居る。ツシだけは別の語のやうに思つて居る人も有るか知らぬが、是をも村によつてはヅシともツジともツチとも謂ひ、或は共代りにタカとかソラとかアマとかいふ別の古語を、應用して居る故に新語ではなかつたのである。

今一段と異論の少なさうな例を擧げると、テテは最初が小兒の父を喚ぶ語から起つたものと思ふが、是を色々の同じ年配の者に、推及ぼす風は各地にあつた。仙臺の濱荻を見ると、父を正式にテテといふ語は傳はつて居るにも拘らず、別にテデといふ濁音化形があつて、是は男性の御附役を意味して居り、さういふ類例は既に下學集にも出て居ると謂ふ。出羽の莊内にもテテオヤといふ語は知られて居るらしいが、テデと濁つて呼べば下僕の年取つた者のことである。さうかと思ふと伊豫の一地には、物貰ひに來る一種の部落民のみを、特に限定してテテといふ處もあつた。飛驒や越前に住む或家筋の、女系を以て相續する者にも此名がある。さういふ家々ではテテの地位が特殊である故に、普通と異なる語を付與して置く必要があつたのである。庄司甚左衞門を君がテテと謂つたことは、既に異本洞房語園に出て居る。遊女の親方ばかりをオトッツァンといふ土地では、もう與一兵衞をさう呼ぶことが少し變に聞える。ウバといふ語の分化も今日では可なり大規模である。記錄の最初の形は古事記のアモであり、沖繩の島々にも汎くアンマが行はれ、伊豆の半島と東北の一部にはウンマ・ウマアイ・ウンメア等の形が殘り、母には一般にM子音が秀出して居

て、從うて今日の新語のママを恕し易くして居る樣だが、奥羽には尙弘く母をアッパといふ語も普及して居る。標準語は今日ではウバを乳母に限り、稀に草の名や山姥などの複合形に、是と異なる用法を保留するのみであるが、それが僅かに變形してオバとなると、忽ち驚くほど其內容を複雜にし、可なり發音や句の構造に注意して居ても、紛らはしいことだらけである。父母の姉妹や其年頃の婦人を、引きくるめてオバサマといふのは小母の義だなどといふ傍から、長女以外の家々の未婚女は皆オバサマであり、是は行く〳〵叔母になる人だから、さういふのかも知れぬと思つて居ると、日本海側では遊女も亦オバでありンバである。要するにウバは本來の語義が女への對稱であり、且つ小兒の物いひの採用であつた爲に、自然に年長女性に對する敬稱の如く感じられて、姥といふ漢語を宛てゝもよく、婆といふ漢字の音でゝもあるかの如く、想像して置いても濟むことになつたのだが、御蔭で若いウバたちは皆迷惑して居る。ババは偶然に婆の字を發見したからこぢつけられた。デヂは不幸にして是に該當する漢字が無い。チチといふ語の分化としか、解し方は無かつたのである。

〔註〕古い言葉の意味を限定して、使はうとして居る例は尙色々ある。形容詞の中ではメデタイやアリガタイもそれであるが、地方に殘つて居るものにはウタテイやウトマシイなどが、殆ど一地每に其對譯を異にして採錄せられて居る。多くの方言集を比較して見て、始めて其語の經歷がわかつて來るのである。副詞に於ても北九州のジンベンニなどは、どうやら中世語の「神妙に」の限定かと思はれるが、今では珍らしいとか稀にとかいふ意味に、使はれて居る土地が多い。福島縣とその二三の郡縣に分布して居るザンマイといふ語なども、斷念思ひ切りを意味する「三昧」が起りらしいが、現在はすべて他人の好意を辭退し制止する時に限り、從うて岐阜福井その他の縣のウトマシイと共に、物などを貰つた時の感謝の辭と化しかゝつ

て居るのは面白い。チョウハイといふ語は北陸地方では親類訪問、ことに嫁聟の生家へ行くことをいふから、「朝拜」の限定保存であることが略判るが、青森縣に行くとそれが歟待な意味し、長野德島その他の地方に於ては、人にへつらふことをオチョウベ又はオチョッパイなどゝ謂ひ、對馬の島では昔忠兵衞といふ者が非常にお世辭がうまかつたので、それでお世辭といふことをチウベヱと謂ふのだと謂つて居る。

九　新物新語

古語に手を加へて新らしい必要に應ぜんとした我々の骨折、即ち新語の節約の場合は、考へて行くとまだ幾らも出て來るだらうが、先づ此程度で止めて置かう。次には愈〻何としても新たに一つの語を設けなければ濟まなかつた場合を考へて見る。誰しも氣が付くのは國の交通が發達して、今まで經驗もせず想つても見なかつた事物が、新たに眼の前に出現すれば、いやも應も無く自然にでも國の語彙は增殖するといふことで、人によつては是が唯一の新語の機會でゝもあるかの如く、考へたり說いたりして居たのである。維新以來の若干の飜譯業者が、自分を日本の言葉作りの命と考へたり、もしくは今一段と人の惡い者が、有りふれた自分の持物を新らしいと見せかける爲に、わざと耳馴れぬ言葉使ひをして見たりするのも、言はゞ熱心に過ぎたる辭典家が、慌てゝそれを拾つて我字引を大きくしようとした結果に他ならぬ。模倣は日本人の決して不得意な藝で無く、輕はづみな採用が短命なる新語を導き入れた場合も少しとはせぬが、それよりも大がかりな、もつと無分別な模倣者は彼等であつた。新語は魚の子の如く、生れるのは無數であるがさう澤山は育つものでは無い。我々は外國語を生で使ふのを面倒がり、符徵のつもりで共譯語を受取つて居る。どんなへたくそな昔の飜譯をも寛恕した代りに、强制が無ければ半日でも之を守護しようとしない。眞似もしたくないものはどしノヽと聽棄てにして居る。そんな日本語といふものがあつてよいかどうか。

深く考へて見ずともわかり切つた話である。どこを境といふとはまだ決して居ないが、或一人の勝手な表現が、日本語の新語となるには關門がある。其門の柱が見たところ少しよろめき、やゝ戸締りの惡いといふ事實が、現在は認められるだけである。地方はさういふうちにもまだ幾分か物固い。内に必要がある場合だけに、少しづゝ改めて通過させて居る。勿論爰でもどつと押寄せて來るものを、防ぎ止める迄の力は無いのだが、少くとも個々の小さな社會で、新たに生れるものだけは吟味せられて居た。是が方言の中の新語が先づ注意せられ、それから翻つて都市の大活躍がもう一度見直されなければならぬ理由である。

飜譯は個々の小地域でも行はれて居る。新らしい事物ならば其前名のまゝで、受入れたら手數が省けるだらうに、事實は是を國風に言ひかへないと、自分のものといふ親しみが持てなかつたらしい。是は一般に我々の古い風習であつたかと思ふ。以前の外來語は殆ど例外なしに、是を存立せしめる爲に特別の努力が拂はれて居り、其癖いつの間にかもう元方には判らぬやうな日本化を受けてしまつて居る。其他の大多數は言葉だけは和製であつた。誰とも知れぬ人が是を考案して、一同の共用物とする爲に、可なり大きな智力を傾けて居るのである。新語が此國の文化の一つの重荷、厄介な未解決となつて居るのも、免れ難い必然の勢ひである。

私は議論を好まぬ故に、つとめて顯著なる多くの事例を集めようとして居る。田舍の新語には微笑を催すやうなものが多い。是は根本の作者が子供であり、又は子供の相手をする單純な人たちであつたからでは無いかと思ふ。最近の例ではオートバイ、もしくはオートサイクルと米語のまゝで呼ぶもの、東京の子供には此エイゴは不人望で、極めてぎごちない自動自轉車が通用して居るが、田舍では夙に上手な飜譯が公認せられて居る。伊勢の北境から熊野路に

かけて、可なり廣い地域に是をバタバタと謂つて居ることは、幾つかの方言集にあるからもう固定したと見てよい。たしかに子供らしい形容だが、きまつた以上は成人も使ふだらうし、其子供もすぐに成人する。石油發動機船も現在はもう標準語か知らぬが、それをいやがる氣持は私などには同情し得られる。瀬戸内海へ出かけて見ると、是をトントンと謂つて居る海岸が多い。讃岐の小豆島ではもつと丁寧にトントンブネ、安藝の佐木島ではトントコ、周防の屋代島ではポンポンセンといふ。ポンポンもしくはポツポブネといふ土地は、此以外にもまだ諸處にあつた。和歌山の南海岸一帶では、今は變つて居るかも知らぬが、十餘年前にはハイカラブネと謂つて居た。其ハイカラも日本化しきつた外來語である。是とよく似た行き方は以前もあつた。たとへば乘合馬車をトテバシャといふなども、靜かな山村の多くに一致して居る。音は其物體が自ら名乘る語の如く、解したくなるのが稚ない人情である。だから鳥虫には啼聲を以て、其まゝ名にした習はしが古く且つ汎いのである。しかし名づけんと思ふものゝ特徴を捉へ、誰でも是認して直ぐに遵行するやうな新語を、與へた例は擬音だけに限らない。たとへば鳥打帽子はハンテイングといふ語を驅逐した。隨分働きのある自由譯と評してよいのだが、田舍ではさういふ經驗をまだしては居ない。從うて其方言は次のやうに區々になつて居る。

チョッキイボウシ	鹿兒島縣薩摩郡	イッパイジャップ	山形縣村山置賜
ミカンチャップ	栃木縣芳賀郡	ゴメンボウシ	石川縣鹿島郡
チョンコ	岐阜縣武儀郡	コペイボウシ	島根縣那賀郡
チレコシヤップ	秋田縣鹿角郡	イングラボウシ	愛媛縣越智郡

ナマイキボウシ　　　廣島縣安藝郡

此中で前の五つは先づ判つて居るとして、後の四つの類似は興味がある。僅かづつの氣持の差はあるにしても、コベイもヂレコもイングラも共にナマイキと近く、つまりは少年の稍ませた者が、よく被つて居る帽子といふことで、東京大阪でも事實は亦其通りである。さうすると此語は土地毎にちがつて居ても、是を付與した動機は鳥打よりも更に全國的だといふことになるのである。

今一つの例は東京でハガシゴヨミといふもの、是も新物であるが土地毎の名が出來て居る。福島山形の二縣で採集せられたのはヒハガシ、秋田縣の南部ではヒムシリ、別に尙ヒメクリといふ土地もあつた樣に記憶する。毎日拷つて取るのが特徵だから、ハガシゴヨミだけでは適切でなく、曆は略しても他に紛れが無いとすれば、此方が寧ろ氣が利いて居る。是は生意氣帽子とちがつて惡評で無いから、或は商人などの發案かとも考へられるが、それにした所で是を採擇して土地の語にする迄には、各處暗々裡に一致した理解が無くてはならぬのである。田舍の模倣といふことも簡單には考へられない。新たに一語を作るまでの努力は要しなかつたといふのみで、隱れたる選擇はやはり社會の意思であつた。巡査といふ名稱の考案者は、是を利用する者の便宜までは思はなかつたらしいが、さて敬稱を添へて呼ばうとすると、其語音は發しにくかつた。其爲でもあらうかホウボウサン、又はホウボシなどゝいふ新語が出來て、鳥取和歌山高知靜岡の飛び〲の縣に行はれて居る。捕亡使であらうと言つた人もあるが、それは考へ過ぎで方々を步きまはるからであらう。或は山林の監守などゝ共にカンクサンと謂つて居る土地もある。斯ういふ名前が各地別々に偶發したと見ることはやゝ六つかしい。さうすれば新語は又最初から擴張流傳の力さへ具へて居たのである。所謂

言語地理學の存在理由は、斯ういふ所にあるやうに思ふ。しかも事情は單なる地形地勢で無く、それに色々の人間を載せた、動くと見えぬ大船の針路であつたので、個々の地域內の小さな現象記述のみを、學といふことは些しく僭越である。自分の研究などもまだ少しでも系統立つたものでは無かつたが、六年ほど以前に玉蜀黍と蕃椒と、二つの輸入植物の地方名を比較して見たことがある（民族三卷四號）。これ等の方言には遠近の一致があつて、新語が新物と共に國內を流傳した跡が窺はれる。其中でも蕃椒は全日本に亘つて僅か三通りしか異なる名稱が無い。九州の約半分と美濃信濃越後を繋ぐ一帶の地域とだけがコショウで、殘りは大體東北がナンバン又はナンバ、西南がトウガラシと分れて居るが、是にも東海道などは可なりの錯綜があり、又そのナンバンにも南蠻芥子から出たものと、南蠻胡椒の後略であるものとが、入交つて居たやうである。この二つの語は出來た時代がさう違ふとも思はれない。單に胡椒をよく知つた土地では、高麗胡椒や南蠻胡椒が迎へられ易く、芥子に親しみを持つ區域では、唐芥子や南蠻芥子の方が採用せられたのである。ナンバンの流布に對する他の一つの障碍は、別に今一種の同名のものが、既に同じ地に入込んで居たことで、何れが前であつたかは知らぬが、玉蜀黍と蕃椒との二つのナンバンも東海道に於ては衝突して居る。

玉蜀黍の方言は蕃椒よりも遙かに複雜で、しかも名の起りが後者とは趣を異にして居た。九州と奧羽の南半と、日本の最も弘い區域を占めて居る新語はトウキビであつたが、是は黍といふ作物が既に在つた爲で、奧羽の北半分の黍を知らなかつた地方では、現に玉蜀黍のトウキビを略してキビとばかり謂つて居るのである。それから又一方には黍に似た別種の作物が前に入つて居て、是をモロコシキビ又はトウノキビと謂つて居る土地があつた。九州の南の部分から沖縄諸島、四國中國から東へ、關東諸州までがさうであつたやうである。斯ういふ土地には無論トウキビの語を入

れることが出來ない。それで玉蜀黍には別の名をこしらへるか、さうで無ければ長くなるのを忍んで、トウモロコシキビとかナンバントウノキビとかいふ新語を作らなければならぬ。さういふものが又少しづゝ省略せられて、是等の地方の方言になつて居るのである。同じ玉蜀黍のナンバでも、中國邊のは南蠻黍の略語であつたに反して、東海道のは南蠻唐黍を切詰めたものであつた。それが隣に在る蕃椒のナンバンと、區別をする必要のある場合に在つて、ナンバトといふ形になつて現はれて來るのである。沖縄の島では玉蜀黍の新語が南蠻唐の黍、もしくは呂宋唐の黍であつた。ルスンもナンバンも必ずしも傳來の證にはならぬ。單に唐とかモロコシとかよりも、又一つ新らしい交通を意味するだけで、事實は輸入の順序を示すに過ぎなかつたのである。しかし兎に角に方言の訛語で無かつたことだけは是で判る。新語は少くとも考へて之を作り、もしくは自分の場合を省みて採否をきめた。他にも色々の提案はあつたか知らぬが、土地の需要に相應しなかつたものは、單なる異名としても殘り傳はることが出來なかつたのである。

〔註〕燐寸と馬鈴薯との新語も私は集めて見た（民族三卷三號）。二者は何れも稍自由に、土地毎の思ひ付きな新語にして、寧ろ珍らしいものゝ興味を傳へようとして居ることが、幾分か生意氣帽子などゝ似て居る。是が或は單語發生の、初期の狀態を示すものでは無いかと思ふ。其中でも燐寸は商業の統一が急で、簡便なるマッチが他の多くの奇拔な命名を征服して居るやうだが、馬鈴薯はまだ餘り中央の公認語に讓歩しようとして居ない。新語の價値といふことを、經濟的の一面ばかりから考へて見るのは誤りである。村の單調なる生活にとつては、音が快く心持がをかしいといふことなども、やはり一つの大きな需要である。

一〇　舊物新語

新たに生れて來た言葉の興味が、餘波を意外な方面にまで及ぼして居ることは、地方をあるい

て來た者の幾度でも感ぜずには居られぬことであつた。農民の語彙は必要以上に入れ替つて居る。單に新たなる入用に導かれて、若干の語詞や句形を餘分に仕入れただけのやうに思つて居ると、いつの間にか一方には是と緣もゆかりも無いものが、不用によつて端から忘却せられ、殆ど人間の記憶が定まつた枡目の、伸び縮みも無い容器でもあるかのやうに思はれることがある。これは或は空な感じでは無いのかも知れぬ。人が談話をする機會や時間は、決して新語に比例して增加するわけには行かぬのみか、近世は一般に夜伽や庚申講の類の寄合は少くなつて來て居る。まんべん無く知つて居る言葉を使ふとしても、一語の使用回數は減じなければならぬ勘定であるのに、日本人は特に新語を愛玩する癖が有る爲か、一度氣の利いた言葉を覺え込むと、可なり繰返してそれを使はうとするやうである。斯ういふ現象は實驗して見ようと思へば方法は幾らも有る。單に私たちだけの經驗として聞流してしまふに及ばぬことである。近い頃の感化としては政治談又は實業談があり、此爲に女性の物言ひにまで漢語が多く入つたが、それよりも大きな影響は、日清日露の戰役があつてから、それが國全體に大きな關心を持たせただけに、多くの生硬なる公文用語までが、遍ねく常民の口に上るやうになつた。法律家といふ善く辯ずる人の言葉つきが、村の口きゝ連中の茶話の日本語となり、軍人が還つて來て青年の新語が豐富になるといふ類の效果が、短かい歲月に又その外廓まで波及して居るのである。是は恐らく單語の新增と入れ替へだけに止まらず、同時に間接には古語の停廢を伴なうて居ることゝ思ふ。ナマリや片言の無意識なるものは却つて後に殘つても、狹義の方言だけは矯正の成績が、幾分か擧がり過ぎて居ると謂つてもよいのである。無差別に二者を引きくるめて、地方人の固陋を歎息しようとするのは、此事實を無視した者の言である。

其證跡を比較的見やすいものから私は援用する。新潟縣天産誌・青森縣總覽、又は水口清君の秋田植物名彙といふ類の書を取つて見ると、明治以後に生れたことの明白な物名は中々多い。たとへばカブトムシは別にオニムシといふ名が古く知られて居るのみであつたが、是をバリカン蟲といふ語は方々の縣に出來て居る。ミヅスマシといふ蟲は東と西と二種あつて、共に昔から數多い地方名を持つて居た。西日本の水すましは本草の水黽ださうで、是には飴の香がするからアメンボウ又はギヨウセン等、嘗めると鹽辛いといふので鹽屋シホウリなどの名がある他に、又その脚の長くてよく走る特徴も注意せられて居るが、それが埼玉縣では今日はクルマヤ又はジンリキヒキと謂ひ、山口縣でも亦クルマヤと謂ふやうになつて居る。今一つの水すましは豉蟲に宛てゝある。黒い梨子の種ほどの蟲で、能く水上を旋轉する故に、我々はマヒマヒと謂ひ、又はミコともイタコマヒとも謂ひ、季節が田植の頃だからソウトメともいふ他に、近世手習が行はれてからジカキムシ、イロハムシなどとも呼ぶことになつて居たが、九州の一部では（別府市など）新たに之をジテンシヤムシなどと、屋上に屋を架して居る。蜘蛛の一種に色彩の殊に鮮かなるものを、女郎蜘蛛と呼ぶのが普通であつたが、是も山口邊では今はヘイタイグモと謂ひ、又一種の屢々自分で腹を切るといふものを、曾てはハラキリといひ又は戲れてカンペイとも謂つたが、たしか千葉縣の東部で之をムカシノサムレェと謂ふ子供がある。これ等は何れも皆此節になつてからの新語だと思ふ。其他植物の方にも「つゆくさ」をインキバナ（是も早くから異稱の多い草であつた）、「とりかぶと」をシヤツポバナ、「たにうつぎ」をシヤボンバナ、或は「やへむぐら」をクンシヨウグサといふ類は、何れも物それ自身の重要度の増加よりは、何かに斯ういふ名前が付けて見たくて、捜して付けたかと思ふ姿がある。即ちバリカンとかインキとか勳章とかの新語は、少くとも小兒輩にはそれたゞ一つの物だけ

に限つて置くのは惜しいほどの興味であつたのである。私たちの今住む郊外の空地などに、やたらに茂つて困る一種の雜草で、ヒメムカシヨモギといふのも新名ださうなが、是には途法も無く澤山の地方名が出來て居る。たとへばテツドウグサ・ドカタグサ・イジングサ・カイセイグサ・メイヂグサなどゝいふのが皆それで、是などは寧ろ老いたる農夫等の、歎息しつゝ付與したらしい痕跡が認められる。ゲンノシヨウコをテキメンサウ、又はイシヤイラズだのイシヤタホシだのと謂つたのは稍古いことか知らぬが、是にも此頃はセキリグサといふ語が出來て、中國にも信越にも共に行はれて居る。「田うこぎ」といふ草をハイビヤウサウといふなどは（秋田）、是に比べるとずつと新らしい發明で、それを言ひ始めた時代は私などもよく知つて居る。長門の海岸部には「ちくわ」をトンネルカマボコといふ名がある。是などは當に隧道の工事が始まつて後といふだけで無く、そんな風に呼ぶことに興味をもつた藝術作品かと思ふが、起りはともあれ既に一般の用に供せられ、又生眞面目な人々までが之を使ふ以上は新語としては成功したものである。福島縣などの小學生徒が、遊戯に使ふ白い小石の、きら〳〵と光るものをギンカエシといふなども、最初は只いはけない戯に出たのであらうが、僅かな間に其兒が大きくなつて、他に適切な名を知らなければ、やはり普通語として使ふのである。斯ういふ事例は古くからもよく有つた。たとへばボンボリといふ語は滋賀縣あたりでは、傘のことをもいひ又一種の紙貼りの玩具の名ともして居り、小行燈だけに限らぬのだが、始めて紙製の器具の行はれた時代に、斯ういふ擬聲語に興味をもつた者は、三つか四つの小兒であつたらう。それが成人の間にも終に採用せられて、一部は既に歴とした標準語になつて居る。作者の地位や名聲のやうなものに、一向重きを置かなかつたのが、古い頃の新語の特色だといふことは言へるやうである。

さて是等の例はまだ幾らも追加し得られるが、新語は必ずしも新らしい事物、即ち舶來や發明のみに伴ふとは限らぬことを、證する目的には是くらゐでも十分であらう。さうすると問題になるのは其動機、もしくは何の必要の爲に斯ういふ手數を、忙しい人々が厭はなかつたかといふことが一つである。私の推量は或は簡に失するかも知らぬが、言葉の用途はたゞ意を通ずるだけで無く、少しでもきき目の多からんことを望む故に、始終鵜の目鷹の目で、印象の強いものを捜して居たものと思つて居る。同じ目的に合ふ語が二つ以上ある場合、選擇の標準は古いとか正しいとかいふことで無くて、殆ど相手の把捉し得る限度に於て、又時としては教示を兼ねつゝ、もしくは向ふの知つたかぶりを利用してさへも、聽いたら忘れぬやうな語を使つて見ようとしたのである。雷同附和といふと惡徳のやうにも聽えるが、島國人の氣持は妙に調子が揃ひ易くて、傾向は常に一端に趨り、殆ど區々の同義語の併存を許さぬ勢ひがあつた。其上に人は或は佛蘭西人以上に、言葉造りの才能に長じて居たのである。たとへ複合なり意義限定なりの條件の下にでも、まだ今ほどの古語が傳はつて居たことは、寧ろ奇瑞と言つてもよかつたのである。古語がやみ／＼と社交界から締め出しを食はされ、もしくは文字通りの默殺を受けて、有れども無きに等しい現狀に沈淪して居る理由は、その一つ／＼に就いて檢すれば、大樣は察知し得られるだらう。野草や鳥蟲の類は輸入品でも無く、又中近世に入つて始めて發見せられるといふことも有り得ない。屢々問題に上ることが無かつたといふのみで、指させば何とか名をのらぬものは稀であつたらう。それが一朝に頓狂な改名をして、更に其以前の名をすら忘れられて居る。新らしい立場から見てよほど感じの鈍い、不向きな名前であつたことが想像し得られる。しかも實際の變化は、仲々その程度では止まつて居ない。鼓蟲や鴨跖草（つゆくさ）のやうに舊名が既に甚だ多く、中には奇抜で感歎を禁じ得ないものが、指を屈して

も足らぬ位に出來て居るのに、尙其以上に印象的なるものを、追增して行かなければ承知しなかつたのである。前代にも久しく新語は歡迎せられたといふ他に、事物の種類によつて殊に古びたものを厭ひ、人々自ら進んで積極的に、言葉を改革しようと協力した場合もあつたのである。

一一　音興味と語形興味　　新語は異國との交通が許されず、旅も商業もたゞ踏固めた路ばかりを辿(たど)つて居た時代にも、尙間斷無く增加して居たことは、今ある言葉自らが物語る歷史である。大正昭和の新たなる文化が、特に此方面に活躍したやうに我々を感ぜしめるのは、一つには「新語」といふ新語の强い印象であり、次には又是にも時代相があつて、一つ以前のものと比べて、資料も樣式も共に著しく異なつて居た爲である。明治初年の漢語流行が、我々の國語の外貌を變へたことは、背後に官府の支援が有つたゞけに、仲々今日の片假字洋語のやうな生ぬるいもので無かつた。たゞ此方は年久しい浸潤であつた故に、文字に目馴れたる人々は、格別激しい變化とも心付かずに過ぎたのである。以前は漢字を書札の上にこそよく使つたが、大部分は節用風の無理な宛字であり、もしくは所謂和訓を代表する迄のもので、實際に用ゐた外國の語は幾らも無く、それも皆十分に日本化した專門の言葉の、長い間に土着したものばかりであつた。耳で一旦其音を聽きながら、掌(てのひら)や疊の上に書いてもらつたり、或は說明を受けて始めて合點し、それから今度は自分も眞似て見ようとしたりすることは、少なくとも田舍では新らしい現象であつた。私の幼少の頃に、村でたつた一人カンゴを使ふといふお婆さんが居た。我々だつて大根(だいこん)ともいへば大工(だいく)とも謂ふのに、どうしてあの人だけが漢語を使ふといふのかと不審に思ひ、よく氣を付けて居ると此老女の漢語は、成るほど大抵の相手には解らなかつた。チンプンカンといふ新語の日本に發生したものも此時代のことである。人は一般に語尾にンの附く語を

面白がり、ちようど饅頭をオストアンデルと謂つたり、袴をスワルトバートルと謂つて笑つたと同じやうに、時々は後で註釋の入用なことを承知の上で、カンとかトンとかいふ語を多く採用せんとした形跡は、以前も寺院や山伏の名だけには普通であつたが、此期に入るに及んで稍法外に擴張した。音の興味に對する敏感は、我同胞の一つの特徴であつたらしく、是に由つて無數の外來語を排除し、又はよくよく此國ぶりに變形してからで無いと、大衆の用語にはしなかつたと共に、面白いと感ずれば時には無くてもすむものまで採擇した。さうして其趣味も少しづゝ推移つて居たのである。明治の維新の際には限らず、總體に人が世の中の變り目を意識して、遲れてはならぬといふ氣持を起す場合には、その內部の動搖は先づ此方面に現はれるのでは無かつたか。長崎の出島や京の五山、以前も幾度か是と似通うた傾向が、單語の更迭の上に認められたやうである。辭典はたゞ單なる集積を以て能事とせず、もう一度時代を劃してそれぐの世の姿を、檢めて見る必要があるかと思ふ。男女の顏付や擧動などは、繪で見たばかりでも變つて居るのがよくわかる。まして言葉はそれ以上に、人が改めようとして居たものである。是に時代がもし反映しなかつたら、寧ろ我々は其理由を知るに苦しまなければならなかつたのである。

語音の組合せは遠い昔から、人が新語を案出する大切な手引きになつて居る。詩歌語物の淸い響きを求むる者は、いつの世とても佳い詞を嚴選して、所謂現代語の十分に豐富であることを感ずる人などは無いのが當然だが、只の日常の談話でも、少しく耳新らしく相手の心を動かさうと念ずれば、もう尋常なる踏襲や複合の範圍に、跼蹐して居るわけには行かなかつた。意外でしかも適切な、容易に公認せられ得る言葉造りは、自然に擬聲語の方に向つて進んで出たのである。だから前に揭げたトントコ舟やボンボリのやうな、明かに童幼の發意に成ると思はれる新語でも、こ

れをいはけなしとして輕蔑してはしまはなかつた。そんなことをして居ると、言語の活氣と新鮮味とを、いつでも犠牲にしなければならなかつたからである。それだけの用意は昔の人も持つて居た。單なる理屈づめでは新らしい語を設けて居ない。例は幾らもあり又それぞれに年代を示して居る。街道の飴賣りが竹まはしを以て子供を集めたのは昔だが、江戸では其音によつて飴屋をカアトロといふ語が出來、それが方言となつて今尙甲州東部には遺つて居る。鑄懸屋が天秤棒を以て小形の吹革を擔ぎあるき出してから、此器をシンパコといふ名は始まり、越中では之をシコバコとも謂つて箱の聯想を誘ひ、横濱附近には別に又此職人をハフヤといふ名も現はれた。伊豆の東海岸では濱の船揚場をハラエー又はハレーエといふが、是は船を引揚げる掛聲から出て居る。熊本縣の北部では吹出し井戸をツンツンといふが、是なども其土工の起りと同じ頃の新語であらう。水の音は殊に言葉になり易かつたと見えて、信州伊那では川の瀨をザザ、從うて瀨蟲をザザムシ、常陸の久慈郡では急流をダー、尾張の知多では水門をゾウ、伊勢の富田では之をドー、加賀の金澤でも堰がドンド、東京にも小石川のドンドン橋があり、ドドメキ・サワメキ・ガラメキの類は、到る處の山間に地名となつて今も傳はつて居る。江戸では下水のことになつた水溜りのドブ・ドンボ・タンボの類、それより稍古いセセナギ・セセラギなども、同じ系統の造語であつたことが比較によつてわかる。中國各地で雷をドンドロ、又はドンドロケとも謂つて居るのは、とゞろくといふ動詞よりも新らしいといふことは出來まいし、大鋸をオホガと稱する元の語のガガリなども、古書に見えて居るからとて是だけは新語で無いとも言はれまい。人の好みの自然とも見られるか知らぬが、兎に角にこの時々の新らしい思ひ付きが無かつたら、如何に我々の物言ひは古臭く、且つ長たらしく退屈であつたか知れぬので、それを避けようとした國民の氣風が、或時は江戸の奴言葉となり、又或時

は陳紛漢や眞似そこなひの外國語となつても、まあ暫らくの間は是非が無いのである。一つの注意すべき相異は、元は事物が有つて後に之に據つて音の珍らしい新語が生れたのが、いつの頃よりか新語が空に行はれて、内容をこちらから持つて行つて押付けた。從つて意味の適切さに可なり著しい隔たりが出來たのである。言葉の外形の面白さに絆されて、心にも無いことが言ひたくなる癖は、曾ては擬古の文藝の間だけに限られて居たのが、今では擬新の會話の上にさへ見られる。口と耳ばかりで新語の眞似をさせて、それを國語の教育だと思つて居る者がもしあつたら、聰明なる日本人は却つて鸚鵡となる危險が多いのである。

だから我々は過去の稍長い期間に亘つて、今少し多くの新語造成の樣式、及び趣味の移り變りを考察しなければならぬ。我同胞の言語技能は、決して語音の組合せばかりに傾注せられては居なかつた。屢〻單調に流れる舊辭の補綴によつて、味もアロマも無い語を作るのがいやで、其爲にこそ折々は借り物をもしたが、他に手段が有るならそれも亦試みて、しかも其風が流行した時代もあつたのである。無論或場合にしか是も應用し得なかつたが、以前人の生活と交渉が多かつた自然物の名前の如きは、今ある大部分がこの命名法に由つて居る。最近の動植物名が藝者屋の看板の如く、上へ上へと限定詞を載せて行くに反して、地方の稱呼には笑つて付けたらうと思ふやうなものが多い。其中でも特に人望のあつた一二種を擧げると、

キツネノロウソク	土筆	越中入善	キツネノチョウチン	つりがね草	上總その他
キツネノセウベンタゴ	龍膽	紀州有田	キツネノタバコ	野げし	大和
キツネノハヒダハラ	馬勃	越前	キツネノシヤクシ	半夏	近江

キツネノカミソリ　石蒜　播磨等　キツネノタヒマツ　石蒜花　越前
キツネノボタン　コンペイトウ草　武藏妻沼　キツネノケサ　日蔭のかづら　越後
キツネノタスキ　日蔭のかづら　但馬その他

同じ例は今もまだ增加中である。「狐の手袋」などは確かに飜譯だが、そんなのがまじつて居ても少しも目立たない。西洋にも斯んな名の付け方をする國はあるやうだが、此點にかけては日本は先輩である。次にもう一つ。

カラスノヲバ　源五郎蟲　紀伊　カラスノマクラ　黑耀石　五島平戸
カラスノマクラ　烏瓜　近江八幡　カラスノセンコウ　やり草　越後
カラスノアヅキメシ　接骨木　津輕　カラスノツギボ　やどり木　信濃下水内

自分たちの幼時の記憶には、雀の豌豆と烏の豌豆とがある。是も野外の物で形が似て大小があつた。「うば貝」をカラスガヒと謂つたなども、一方に蜆貝をスズメガヒかと思つたあどけない誤解が元らしい。其他蛙の蒲團だとか鷺の尻刺しとか、水邊の草の名は水に住む者に托し、山ではサルヲガセ・サルノコシカケ、山姥の襷だの天狗の錫杖だのと、えらい所まで空想を働かせて居るが、是も後には稍流行を追ひ奇を好んで、おまけに數が餘りに多い爲に、くだ〳〵しくて物の名には似合はなくなつた。興味が行き過ぎれば何にでもいやみは生ずる。後には果して其樣な一時の思ひ付きに、人を拘束する力があつたらうかを疑ふばかりであるが、當初需要が有り又十分な效果が無かつたならば、誰が此樣な面倒くさい仕事を始めよう。つまりは此技術も年と共に樣式化して來て、僅かに因習に依つて支援せられて居るに過ぎぬのだが、少くとも其初期の事業だけには、我々の國語を活潑ならしめる效果があつた。

一二　異名と戯語と隱語

是等の手のこんだ造語中には、最初から大きな抱負も無くて、至つて氣輕な心持ちで提出したものが、圖らず成功したといふ例が多いやうである。我々も書生の頃にはよく經驗したやうに、所謂うま合ひの小人數の間には、單に教師の綽名ばかりで無しに、さういふ試みは常に繰返されて居た。案に典據があつたか先例があつたかは別として、兎に角に話のはづみや問題のこみ入つた場合に、仲間の誰も彼もが言はんと欲して未だ口にし得ないものを、すばやく言つてのけようとする者が、一人か二人は必ず有る。普通の交際ではうまく言つたと褒めて見たり、なある程と感心したりするだけで、めつたに受賣までしようとする者も無いのだが、心の通うた友だちの間だと、喝采が直ぐに可決であり、中には贊成の手續すらも無しに、自分たちで共に言ひ得たやうに滿足を感じて居る者もある。總員の是認が新語の條件であつたといふよりも、寧ろその小さな社會の意思が、或一人の口を假りて表示せられたといふ方が當つて居る。新語を民間文藝の一種と見る私の考へ方は、あまりまだ同意者も無さうだが、斯ういふ古風の殘留した場合は勿論、是が追々と複雜化した今日の都市の現象に照し、乃至はその中間の如何なる段階と突合せて見ても、どこにも不都合な所は無いやうに思ふ。

民間文藝と言つても範圍は汎いが、試みに童謠の例を取つて新語と比べて見よう。童謠は昔は星が歌はせるのだと謂つたといふことが、山海里なる書物には見えて居る。それ程にも作者は無名なものであつた。現實に何の某が唱へ出したといふことを、知る者が全く無いわけでもなく、又捜したら判る時もあるのだが、我も人も共に是を明かにする必要は無いものと思つて居たのである。次には是を歌ひ出す技能、即ち群の感覺を先づ的確に感知して、それを言葉の形にする才分は、誰もが同じ程度に具へて居るわけでは無いから、氣を付けて居れば何の某が最も長じて居ると

いふことも判明する筈だが、さういふことには久しく頓着する者が無かつた。もと〳〵一群の共に思ふことを代表するのだから、默つて聽く者までが自分等が謂つたと感じて、特に彼がさう謂つたとは考へなかつたのである。其上に同じやうな選手が實際は幾人もあつて、其間の甲乙はきめられなかつたらうと思ふ。名を重んずる必要の無い者は、ちやうど小學校の教室で三分の二も手を擧げるやうに、むやみに其技を試みるので、人としては傑出することが出來なかつた。卽ち千百の無用の試みの中から、たま〳〵一同がうまく言つてくれたと思ふ僅かなものだけが、忽ち群の作品の如く認められて、內にも是を記憶し外にも是を眞似て、追々に流傳して行くことは、童謠もよく似て居たやうに思ふ。それから今一つの類似としては、兩方とも是を言ひ始めた者は固より、最初の採用者にも是によつて日本の一語を制定し、又は改造しようといふ野望が無かつたことである。山詞や沖詞もしくは伊勢の七つの忌詞の如く、平素の用語を禁止せられた場合だけは別だが、其他はたゞ是からは斯うも謂はうでは無いかといふ、一つの異名の勸說に過ぎなかつたのである。ところが是は又日本人の癖であつたかも知らぬが、我々は兎角同義語の容認に吝かであつた。稀に今でも三つ四つの同地異名を持つ語もあるが、それは一時的であつて程なく何れかの一つを主用し、他を粗末にし又忘れようとする。だから手毬唄や子守唄を採集しても、土地毎の變化が甚だしいと同樣に、方言の異同が非常に複雜なのである。一つの事物に一つしか單語があつてはならぬといふやうな考へ方は、國語の統一の爲にも大きな邪魔ものであるが、それは新語の提案者たちの知つたことで無かつた。寧ろ其追隨者の餘りにも熱心に、又偏狹であつたのがよく無いのである。

　標準語が今まで各地方の新語どもと鬪つて居たことは、私には誠に笑止なる徒勞のやうに思へる。地方の言葉は滅

びもしようけれども、是を面白がつて居る者が現にあるのだから、あすの日にも亦生れる。さうして次の新語は又次の民間文藝と同じく次第に個人の技巧が働いて、社會性の薄いものになつて行かうとして居るのである。近代の新語の中には、誰にでも容易に企てられぬやうな、又必ずしも土地の人々の意圖を代表して居らぬやうな、手の込んだ趣向のものが多くなつて來た。是も亦民謠や謎や諺と同じやうに、素人が時々其製作に携はつて居た舊慣を斷念して、次第に聽衆の側に行つてしまはうとして居るので、大袈裟なことをいへば天才の承認を意味し、又文藝職業化の開始を語るものとも言へる。我々凡人は此樣にまで謙抑に己を虛しうして、尙會話を活き〳〵とさせるやうな新鮮な言葉を待望して居たのである。眞似は卑屈のやうだが、是が大昔以來の、國語を培養する常の道であつた。たゞ趣味の偏倚が甚だしく、多くの異名の併存が望まれなくなつて、その技藝の競爭が一段と烈しくなり、いつも稍奇を衒ふ少數の先達にばかり、引きまはされる結果を見たゞけが今風なのである。是も實例は幾らもあるが、紙面が乏しいから澤山は擧げられない。薩摩芋をくりよりうまいから十三里と呼び始めたなどは、ほんの或瓢輕者の駄洒落であつたらうが、九州の或縣などでは旣に是を方言集に載せて居る。關東では夙に又之を八里半と謂ひ、其語を幼兒が使つたことが、三馬の浮世風呂にもちやんと見えて居る。大體に都市が斯ういふ新語の問屋町であつたことは明かだが、田舍とても決して受賣ばかりはして居ない。たとへば山子の背に負ふ編袋は、全國を通じてスカリといふものが多いが、越後の南魚沼の奥あたりでは、その稍大ぶりなものをゴカリと謂ふ。スカリを訛つてシカリといふ故に、一つ大きいのをゴカリと謂ひ出したのである。山に入つて行く材木商人には懸引が多いので、是を山バクロウと呼んで居る土地は珍らしくないが、播州の奥在所では、それをもう一つ捻(ひね)つてボクロウなどと謂つて居る。玉蜀黍は九州では汎くトウ

キビだが、既に一種の唐黍を持つて居た南部の田舎では、もう一つ何か限定辭を副へる必要があつたことは前に述べた。薩摩の半島で是をヨメゾギッ（谷山）、もしくはトキッノヨメジョ（知覽）と謂つて居るのは、即ち唐黍の嫁じよである。髪を長く垂れ襟を何枚も合せたのを花嫁に見立てたので、可なり念入りな謎に近い新語であつたが、現在此地方にはもう是以外の名稱は無い。蜥蜴をヘビノイシヤといふ方言は中部地方ではよく聽くが、北九州では一帶に魚狗即ち「かはせみ」といふ鳥を、ヒラクチノイシヤと謂ふさうである。此鳥が背を丸くし首を突出し、撫でつけの様な頭をして穴の中へ入つて行く風體を、醫者と見立てたのは少し人が惡いが、五六十年前の村醫の人品も、それから又其頃の周圍の感情も、微笑ましいほど此一語によく表はれて居る。さうかと思ふと外から來た人には、說明を聽かぬと面白味のわからぬものもある。津輕で晝顏の花をオタノマシヨと謂つたのは、この花の底には小さな蟲が居て、子供が手に持つて案内を乞ふ聲を掛けると、中からのこ〳〵と出て來るからださうである。靜岡縣の海岸で、「やどかり」をアンナイモウと謂ふのも是と近い起りであつた。同じ地方で槇の實をオショコゾ、又はヤンゾウコウゾウと謂ふなどは、紅い小さな肉果を負うて居るあの樹實の姿を見ると、一應は成程と思ふやうであるが、是も兒童がよく聽いて居る和尚と小僧の笑話を知つた上で無いと、それが採用せられて一般の通語となつた迄の、本當の心持は呑込めないのである。

全體に新語の發案を、一種の文藝と視るやうな氣風が無かつたならば、斯んなにまで手數をかけて意外な珍らしい名を普及させ、我々を不審がらせる必要は無かつた。外國語採用の無造作とはちやうど反對に、少し念入りに過ぎる弊も曾ては有つたのである。しかし其御蔭には今ある言葉から、我々の祖先の氣働らき、愉快に世を送らうとした心

持などは窺はれる。

是等も最初は皆少しでも異名の數を殖さうとしただけで、取つて替らうと迄は考へなかつたのであらうが、案外に今謂ふファンが多かつたのである。大分縣の速見郡では「ちんば」をダイコヌシト、即ち大根盜人と謂つて居る。是は霜月二十三日の大師講の由來として、昔脚の不具なる老女が、大師さまに供養するとて人の畠の大根を盜み、大師が其罪を匿さんが爲に、雪を降らせて足跡を無くしたといふ故事があるからで、信越以東の諸國では今もよく謂ふ話だが、以前は九州邊にも弘く行はれ、この新語を聽いて雷同する者が多かつたものと思はれる。對馬その他の島々には鰈をオヤネギリといふ。親を睨んだ罰に眼が斯んなになつたといふ話から出た名らしいが、此話ももう大抵忘れられて居る。三河の加茂設樂の村々では、「あをじ」といふ小鳥をバツタラシ、婆にもつかまるかと思ふほど逃げない鳥だが、實際は中々敏捷で、結局は婆がたらされる。それから又尺とり蟲をドビンワリと謂ふなども、土瓶が行はれて以來の新語に相違無いが、やはり此蟲を樹の小枝と間違へて、土瓶を引掛けて落して割つたといふ、一つの笑話を背景にもつて生れて居る。斯ういふのは土地だけでは相應に知れ渡つた話だから、それを土臺にして言葉が出來た事情も稍わかるが、中には全然或一人の考案に成つた判じ物同樣の新語もある。たとへば備前の兒島郡で、春さきの曇つた天氣をサヽゲビヨリ、其心は「きつとふらうでも無い」といふのは、如何にも古風な口合ひである。フロウといふのも此地の方言で、大角豆とよく似た豆だからさう謂ふのである。陸中の各郡では宵つぱりの子供をフルアヂキ、古小豆だから中々ねないといふ洒落で、それが「煮えない」と同じだといふことは、外から來た人には一寸判らぬだらう。是などは作者も略想像し得られる。座頭の坊などは始終こんな小さな頓智を貯へて、今でも時々取出しては落ちを取つ

て居たのである。陸前栗原郡誌の方言の部には、いやに物體ぶることをビハゴシラへといふ語がある。是も古風な新語だが、やはり盲の坊様の作で、技藝は下手なくせにいつ迄も支度に念を入れることを、自分の琵琶支度に喩へたのが喝采せられたのである。しかし彼等で無くとも日本人の中には、大きな雄辯家は出なかつた代りに、斯ういふ短かい輕い皮肉で、人を怒らせずに効果を擧げる術は發達して居た。下手な大工をカマスダイク、下手な桶屋をソウケイヒダといふ類の、笑つてしまふやうな惡口は常用になつて居る。その農民等が子供に名を附けるのに、やたらに何彥だの何義だのといふと、直ぐに其そばからナサマなどといふ批判の語が出來る。名前ばかりが「樣」だといふ意味である。實際我々の文法は今でもまだ極度に窮屈で、人を拘束することばかりを目途にして居る。もしも斯ういふ方面に一條の活路が無かつたら、少しく感情の鋭敏な者共は、夙くの昔に息づまつて死んで居たかも知れぬのである。

一三　無形名詞の成長

藤井乙男氏の諺語大辭典などには、この種の新語はすべて諺だとしてある。コトワザといふ日本語の語義から言ふと、是までを含むのは當り前かと思ふが、さて西洋の Proverb といふもの、もしくは漢土の諺と稱するものと、比べて見た場合は如何であらうか。我々が日常利用して居る言のわざには、始と終の整うた一つの文句もあれば、何々見たやうにといふ副詞型、狆がくしやみをしたやうなといふ類の形容詞型もあると共に、單なる複合名詞の、異名として設けられたものもあるのである。それが表現の中に織込まれて、繼目も無しに使はれて居ることは同じだが、單語といふ場合には最後のものしか考へられず、それが又格別自由に應用せられて居る。技術は一つでも製品としては差別してよいのかも知れない。或は又是は戲語であり、もしくは隱語であるから別物だといふ人も有りさうだが、作つた動機は何であらうとも、事實浮世風呂の八里半のやうに、三つ兒も眞似する頃にはもう

普通の語と變りは無い。隱語は世間が知つてしまへば、もう隱語では無くなつて居るのである。

但し斯ういふ考へ落ちともいふべき趣向の語は、すべての我邦のことわざと共通に、必ず座を花やかにし聽く人を笑はしめる目的を持つて居る。泣いたり憂へたり嚴粛に物を考へたりする際には、わざと其使用を避ける位に、此言葉は似つかはしく無かつたのである。如何に此方面に新語が增加しても、それでは間に合はぬ問題が人生には段々多くなつた。それに應ずる爲に學問に携はる人々が、他國の語と文字で思索したことは、我國語の上には大きな損であつた。よその國にも斯ういふ人は有るのかも知らぬが、日本には殊に無學な智者、眼に一丁字無き賢人といふものが多かつたやうだ。さういふ人たちの新語の需要は、常に一程度までしか充されて居なかつたのである。漢語の採用は便利のやうだが、それは繪に描き形の比べられる物だけで、一たび心意の上の現象に入ると、所謂字訓の一致は學者にも確かめ難いものが多く、まして耳學問では誤解を免れることが難い。だから我々の思惟の進むと共に、何とかして各自の實驗を以て裏打ちしたものと、適切な言葉を見付けようとして居たのであるが、其努力の過程は今ある標準語の上には殆ど全く現はれて居ない。私たちが各府縣の方言を學んで行くうちに、二三やゝ判りかけて來た事實はあるが、是は何れも方言の今少し實のある研究によつて、將來確證しなければならぬことばかりである。問題の一つは前にも述べたやうに、新語の好みには時代相があつて、或時はもつと輕薄で無い内部の要求から、質素なしかも有益な語彙の增加に、主力を傾けて居たこともあつたかといふ點である。必ずしも一つの方針が新たに生れて他に代るのでは無く、前から存在した幾通りかの様式のうち、彼に就き是に奔る折々の流行があるのだとすると、其移動の跡を詳かに知ることは、やがては意識した改良にも導かれ得るのである。一つの例をいふと動詞から名詞をこしらへ

ること、是などはコヒとかオモヒとかの如く、夙く世に現はれて文藝に利用せられたものもあるが、その急激なる同類の增加は、遙かに後世の現象のやうに思はれる。さうして我同胞の物の考へ方が、これに依つて非常に樂になつただけで無く、今まで名狀すべからずと謂つて居た色々の心意の動きまでが、それぐ\適當に名を付けられて、人にも獨語にも言ひ現はす自由を得たことは、疑ひも無い一つの進歩であつた。それがもし今日の所謂哲學する人などに扶助せられて居たならば、どれだけ我々の學問は獨立して居たか測られぬのだが、不幸にもそれは切れぐ\の田舍の事業であつて、主として凡俗の用を辨ずるに止まり、たゞ將來に向つて大きな可能性を證明したに過ぎなかつた。動詞も次に說かうとする如く、まだ現在は十分增加したと言へぬが、もしも其全部の連體形を、一つぐ\別の言葉にしあげるならば、それだけでも日本語は可なり豐富になる。といふことを前人は既に實驗して居るのである。是には勿論使用者間の約束を要する。單に或一人が無斷で使つても聽く者が承知をせぬ故に、やはり新語の手續は履まねばならぬのである。オトシといふ語は東京では火鉢の銅製の底のことだが、越中では水田のあと水口を意味し、下總常陸では雞の雜種を意味し、壹岐島などは又便所の甕のことである。同じく落すといふ動詞から出た語でも、集團毎に異なつた內容に限定せられて居る。メグリは標準語では周圍のことであるが、日本海側の廣い地域では、是を播木の意に用ゐて居る。ナラスは物を水平に横へることだが、關東のナラシは稻架のことであり、九州その他では衣掛け竿を謂つて居る。さういふ中でも東北と西南と、遠く離れて一致して居るものは、其語の早く出來たことを談るものかも知れぬ。眞綿をネバシといふ語は奧羽にあり、又中國以西にも行はれて居る。米の洗ひ汁をニゴシといふのも、福岡縣で聽き又信州より此方の東國でも之を聽く。陸中山目邊で盥をアラヒと呼ぶのを見ると、タラヒをタラフ(手洗ふ)と

いふ動詞が前であつたかも知れない。ソクヒも今日は速飯の如くこぢつける人もあるが、ソクフといふ動詞は既に犬筑波集に見えて居る。鞭はムチ・ブチの訛音が優勢になつて居るけれども、ウツといふ動詞の古い岐れであたことは想像せられ、フグリは袋の變化では無くて、フクルといふ動詞の以前の言ひ方に、是を導くやうな形のあつたことを思はしめる。陰嚢をサガリと謂つて居る方言も現にあるのである。私などの意見では、動詞が先づ自由に出來て、それから入用のあるたびに、引出しては個々の名詞を造つて居たので、それも區域が小さく限られ、且つ物々しい抽象名詞を必要とせぬ人に委ねてあつた爲に、起るべき多くの新語が起らずして今に至つたのである。

希臘は精確な好い言葉を、無數に持つて居た國民として羨まれて居るが、彼とても一度は原始時代があつたらう。最初から六つかしい概念の語を抱へて、此世に現はれて來た氣づかひは無い。やはり今までの日常用語を分化させ又限定して、追々と物を考へるのに便利な語を造つたので、多分彼等の隣に漢語も英語も無く、同時に又吉備眞備とか加藤弘之とかいふ人が居なかつた御蔭であらう。言はゞ我々は餘りに氣短かであつた。我家の釜の飯の熟するを待つて居られないほど、新らしい智識に飢えて居たのである。內で何の用意もして居なかつたとは決して言はれないし、又其方法が無いともいふことは出來ない。新語は此方向に徐々の歩みを進めて居たのである。一つの例をいふと、日本人は中々よく怒る民族だが、「怒る」を意味する古語は甚だ乏しく、今ある俗語は方言として誠に區々である。地方それぞれの新語が近世に入つて作られたのである。大體に分けて其種類は五つ、中央は「腹が立つ」だが西へ行くとゴウガワク、又はゾウノキリワクなどと謂ひ、東の方ではキモガイレル若くはゴセヤケルがある。何れも怒つた時に胸から下腹にかけて、熱くなることの形容のやうだから、この五つのハラ・ゾウ・キモ・ゴウ及びゴセは同じものであ

う。ハラもキモも元は眼に見える肢體の一部だが、是も既に色々の心の狀態の名として用ゐられて居る。ゾウだけは臓の漢語らしく、九州以外には使はぬが、ゴウの元の形のコはそれと同じで、河童に尻のコを拔かれるなどといふ時は内臓を意味して居る。セの方はセイと延べて、漢語の精の字の音だと思はれて居るが、やはり背中のセと一つで、肩では無しに呼吸機關のことであつたかと思ふ。「セが切れる」といふ類の用法は今でも多い。惰けて働かぬ者を標準語では骨惜み、東北へ行くと是をカバネヤミ又はセヤミと謂ひ、少しづゝ無形の或狀態の名に、進めて行かうとして居るのである。宮城岩手の二縣にはミノコナシといふ語がある。ミノコも亦ゴであつて、是を氣力とか忍耐とかの意味に使ふ故に、ミノコ無しが意氣地なしのことにもなるのである。それからドワスレやドショウボネなどのド、ヒヨワのヒの如きも、胴や脾の外國音を、借用したものとは思はれず、氣の字に同化しきつた我々のキも、本來は氣體で無く液體であつて、寧ろ血液のチと分化した語らしかつた。ヅクといふ語の內容に付いては前にも何かで述べたことがあるが、現在は普通ヅクナシといふ形で行はれて居る。それが奥羽では臆病者を罵る語だから、それだけから推すとヅクは勇氣らしいが、越後會津の境ではヅクナシが間拔けとんまのことだから、ヅクが智慮機轉を意味し、信州甲州ではヅクナシが所謂無精者だから、卽ち又根氣とか精勵とかがヅクである。大よそ理想の青年男女の美點の總稱ともいふべき語であつたものが、新たな道德稱呼の埒外に置かれたばかりに、今では土地毎にただ片端を把へて、消極的の場合のみに人を嘲る詞として使つて居るのである。古い方言集には此語の起りを說いて、或は車などの軸であらうといひ、或は弓の鋼(づく)から出て居るともいふが、それ等の用例をも含めて、ツクは日本では直立するものゝ名であつたことは、杭や柱をツクと謂ひ、さては澪標(みをつくし)のツクシなどからも推測し得られる。さうして斯ういふ場合の人間のツ

クは、本來は脊骨のことだらうと思ふ。ヅクナシは單に音が興味を繋いで、國廣く流布して居る。駿河や伊豆に行くと、其ヅクナシが又二つに分れて、一方は惰けて働かぬ者のことだが、それをヅツナシと謂ふと本人の側から、苦しい骨が折れるを言ひ表はす語になつて居り、それが西の方は中國の半分までにかけて、病苦や貧苦を形容するヅツナイとなり、時には術無（じゅつな）いなどゝ文字に書く者さへ生じたのである。無形名詞の新造は斯くの如くにして將來を望まれて居た。それが苗にして秀でなかつたのは、決して作者の責では無いのである。だから私には敗軍の跡を弔ふやうな感じがする。

一四　動詞增加　　我々の標準語が省みて自ら耻ぢなければならぬのは、是ほど複雜又多樣なる人生の活動、それを一つ〳〵見分けて居る微細なる感覺が、今尙五分の四以上まで、言ひ現はす言葉を與へられて居らぬことである。これでは何としても濟むわけが無いから、さしも名譽ある東京の中流家庭なるものでも、內には色々內輪の語をこしらへ、常は必ずしもよそ行きのものばかりで間に合せては居ない。田舍は尙更晴れといふ機會が少いから、前から有るものを心置き無く用ゐて居るのである。無くて事足るならば勸められて止めもしようが、代りが無いのだからそれを愼しむと或心持だけが言へなくなる。それでも笑はれるのが辛さに默りこくつて居る人を見ると、殘酷な話だと私などは思ふ。つまりは新語の供給が怠られて居るのである。それは唯單なるクッツブスやフットバスの類であらう。何が大事かとせせら笑ふ者も無いとは言へぬが、是とても普通の「つぶす」や「飛ばす」を以てさし替へられぬ氣持はある。しかも自分たちのいふのはそんなものだけで無い。前には日本人は時の用に應じてよく動詞を作り、今はそれを戒められて居るのである。人の發する聲はなり高しなどと謂うて、ナルといふのが古い動詞であつた。ドナルやウ

ナルは東京でも毎日使つて居る。地方は新たにもう一段と分化させようとして居たのである。次の表の地名は下に其他か等々を附して讀んで貰ひたい。中段の對譯は方言集の記載である。

ヂナル　大聲でどなる	栃木縣東部	ヅナル　どなる	津輕、北海道
ガナル　怒號する	足利館林飛驒	ギヤナル　どなる	米澤市
ガシナル、ガチナル　どなる	靜岡縣	ワナル　叫ぶ	加賀能登越前
ワナル　わめく、うなる	鳥取縣	オナル　うめく、唸る	備中中部

是等を訛音であり、ウナルを正しいなどゝいふ理由はどこにもない。メクを下に附けた動詞にはウゴメク・キラメク・トキメクなどが古い所にもあり、ワメク・ウメクは文學にも有るので、ちやんと辭典には認められて居る。語原は知らぬが「外からはさう見える」といふ感じであり、メカスといふ語さへ今は定まつた意味を以て行はれて居る。この前例が確かなればこそ、田舍では色々の何メクをこしらへたのである。

ホメク　ほとほる、熱氣内に在ること	日向	ドメク　馬鹿に騒ぐ	壹岐
ホトメク　欵待する	柳河、佐賀	ソソメク　私語する	島原半島
バメキドリ　あとり、蠟嘴鳥	霧島地方		

是等は何れも九州の方言だが、奥州の田舍にも胸をワクメカスだの、鼻をフフラメカスだの、ホクホクメカスだのといふ語が行はれ、八丈の島でも笑ふことをヘヘラメクと謂つた。卽ち遠境に於て相似て居るのである。此様な例はまだ大分見付かりさうである。たとへばウドムといふ語は伊豫と石見では唸るに同じく、鳥取市の附近では響き渡るこ

と、大分縣の大野郡では高聲を出すことだといふ。關東では粉などの水の中に沈澱するのがオドムである。ドムの本來の意味は不明であるが、是と淀むのヨドム、もしくは桃むのイドムとは成立ちがよく似て居る。東京のイガミアヒは相罵であるが、仙臺では又唸るをイガムと謂つて居た。是と標準語のヲガム・ユガム・カガム・セガム、もしくはシヤガムなどと別來だとは言ひ難い（ハニカムも多分此仲間であらう）。其他イトナム・サイナム・タシナムの類、又はワカヤグ・サヤグ・ハシヤグの一列など、生れた時代には前後があり、文藝との親疎は著しいとしても、一つの型が前に存する故に、之に倣うて次の語は作られたので、通例の語學者以上に各語の性質を理解し、その活力に觸れて居たもので無ければ、言ひ出すことをも出來ず又承認することも出來なかつたらう。是をたゞ單純なる擬聲語ともいへぬことは、次々の變化が追々と複雑な感じを表はすやうになつて居るのを見てもわかる。適當な時期に傍から支援するものがあつたら、此方面だけでもよほど澤山の新しい動詞は出來た筈であり、それから又色々の名詞を、導き出すことも不可能ではなかつた。寔に惜しい歴史と言つてよいと思ふ。

しかも斯ういふ手輕な複合法だけで、あらゆる入用に行渡らぬことは、昔の人の方が却つてよく知つて居た。それで多數のことわざの句の、當初必ずしも新語とする計畫も無かつたものを、一同が牢く記憶して頻々と之を使ひ、後には常の言葉にしてしまつたものも亦多いのである。たとへば小兒や若い娘などのすねて機嫌の悪いことを、山陰は一帯にブリツルと謂つて居る。元は恐らく戯語又は隱語で、寝小便をすることを周防でゴリチオス、秋田津輕でマストルといふと同じく、ぶり〲するから鰤釣るであつたかと思ふ。九州では是をハブツル、中國四國は一般にハブテルで、共に今では何故さういふかを知つて居ない。信州から越後へかけてイボツル又イボキルと謂ふのは、蟷螂の方

言をイボキリ蟲もしくはイボツリといふのと關係があつた。此蟲はよく怒る故に「腹立ちばゞさ」などの異名もあり、終にはイボツリを怒ることゝ思つたのであるが、此方はイボムシリといふ古名もあつて、疣を治するに利用したのが元であつた。それが現在はあべこべに解せられて居るのである。醉うてクダヲマクことを鹿兒島ではヤマイモホル、北陸東北では汎くゴボウホルと謂ふ。何れも始のうちは笑はせたであらうが、今日はまじめくさつた人々の間にも此語が用ゐられて居る。ことわざとしての趣向は尙わかつて居ても、もはや符號のやうにしか考へられて居らぬのである。始めて聽く者には感心する作品が幾らもある。斯ういふものこそ是からも集めて見なければならぬのである。複雜なものからさきに擧げると、

モチワラキセル	おだてる	津輕	ハヒダラカツグ	迷惑を被る	仙臺
ゲタヲアヅケル	難題を持込む	近江湖南	アミヲアゲル	打切る	甲州中部
ササラスル	離間する	佐渡	ネソヲクル	執拗にくり返す	備後
イソヘヨル	行きづまる	近江	イヲカフ	培育する	信州下伊那
イシヒク	內證金を作る	豐後	ナシウル	あてこする	羽後河邊郡
ククツル	いぢめる	紀州			

この終りの二つは短く說明する必要がある。ナシは秋田では女などの人に物いふ際に、語尾を强める爲に添へる音である。ナシといふ語尾に力を籠めるのを梨賣りと戲れたのである。ククツルは子供の兩頰を平手で挾んで釣上げることで、腕力のよほど差等のある者の間で無いと行はれない。だから汝の如きものは子供の樣に取扱つてやるといふ輕

蔑の意も含んで居るので、只いぢめると解しては些し當らない。何にもせよ右に列擧したやうな句の意味を、もし正面から「よい言葉」でいふとなると、長たらしいのみか感じが丸で出ない。乃ちこんな新語を雇はなければならぬ所以である。今日活きて働いて居る方言の中に、無用でたゞ止めてもよいものが有るなどゝ、思ふ人があつたらどうかして居る。

一五　形容詞の缺乏　斯樣にまでして居ても語彙は尙不足であつた。御互ひが何か少しく新らしい事を說かうとするに臨んで、幾度か深い苦惱を感ずるのは、心と言葉との隔離が余りに大きいからである。日本人の殊に宿命的に苦しめられて居るのは、何は置いても形容詞の足りないことである。此點にかけては佛蘭西は羨んでもいゝと思ふ。何の一つ〳〵飜譯し得なかつた語は無いと、好い氣になつて居る人も大分見えるが、それが悉く下品な「的」の字を、下に副へなければ少しでも用は足りない譯語である。歌を作る者やよい文を書かうとする者は、無意識に形容詞を使はぬ樣に骨折つて居る。さうで無ければ死んだ古文辭を掘起して使つて居る。どうして此國が又是ほどまで貧しい形容詞で、永い間暮らして行かれたかは不思議であるが、考へて見ると是は我々が同じ谷あひに、同じ空氣の中に久しく共住した爲に、人の感ずることは共通り自分も感じて、顋をしやくつても眼でまばたきをしても、現在の用だけは足りた爲であつた。記憶も印象も共に續く間柄では、あんなのといへばすぐに合點し、想像の力も略同等ならば、そんなことと謂つて略通じ、たま〳〵呑込の悪い者があるときは苦笑ひをして見せると、後には氣がつき又はついた樣な顔もする。さうして遠くの緣の無い他人に對しては、「言ふにいはれぬ」とか「名狀し難い」とか、言つてそれでも察してくれたのである。つまりは國柄や社會組織が、異常に此品詞の用途を低くして、久しく過ごし得た結果としか考

へられぬのである。其爲であらうと思ふのは、改まつた交際の辭令の中に、必要あつて使はれて居た形容詞は、何れも的といふのに近い借り物であつて、心安い仲間だけでは、精々五十か六十の、よほどの未開民族でも知つて居るやうなものだけで、兎に角に交通の目的は達して來たのである。以前世相史の中でも此事は說いたが、我々の繪畫は今の程度に發達し、染料の許す極限まで、常に我々の色模樣は變化して居たのだが、色に關する形容語はびつくりするほど尠ない。これは國人の幻影が單彩であつた爲で無くして、互ひにそれを語りかはすべき言葉の入用が少かつたのである。心の隈々の晴れ曇り、時と境とによる幾十階の色合ひなども、やはり以心傳心を主として居た。將來どういふ風にしたら是を自由に、否む者にまで傳へられることにならうか。支那の俗語にも無いやうな何々的の連續を逃れて、安らかな文章が書けるであらうか。是こそ我邦の言語文化に課せられた、最も難儀な宿題であつたのである。

古人が少しづつこの佗びしい貧窮から、脫して行かうとした手段は奇拔であつた。日本のことわざが外國の俚諺とはちがつて、一種特異な方向に發達して來たのは、斯ういふのも大きな理由の一であつた。我々の間に於ては、「ことわざ」といふ語は學問的にしか用ゐられて居らず、其代りにはタトヘといふ名があつた。タトへの大部分は單なる形容詞を使はずして、總括して事物の狀況を說示する用に供せられて居た。是はちやうど動詞が色々の接頭辭や形の修飾を以て、努めて鮮明に僅かなる感じの差を顯はさうとしたこと、又は名詞がいやが上にも好み擇ばれて、少しでも多く特徵を描き出すものが歡迎せられたのと同じで、私の意見では全く形容詞の微力を補ふが爲であつたと思ふ。歌謠で無い限りは全體としての效果が、同率以上であれば言葉の役は遂げたのである。或は反對の側から斯んな便法が具はつて居た故に、愈々形容詞の數が增加しなかつたのだと、言ふことも出來るかも知れない。ところが近世の文章

演說には、さういふ色彩の濃い輪廓のくつきりとした地方の新語を使ふことを勸めぬのみか、物數を少く簡明に用を辨ずることを、本來の目的としたタトヘゴトも亦排斥する。曾て議會で「目くそが鼻くそを笑ふ」といふ成句を援用して、取消を命ぜられようとした議員もあつた。その爲に長くて退屈な、どこにも人を打つ所の無い雄辯を我々は强ひられるのである。私は斷じて復古論者では無いが、從來の國語利用がこの二つの言語藝術、卽ち剴切でをかし味を持つ短いタトへと、幾分事を好むに近い奇警なる造語とによつて、容易に培養し難い形容詞の凶作を、今まではどうなり斯うなり凌いで居たことを明かに知つて、さて二者を退け去つたら其後はどうしてよいかを、是非とも考へる様にしたいと思ふのである。

〔註〕よその國でならばよい形容詞を使はうとするやうな場合を、一つの氣の利いた名詞で間に合せようとした例は、面白いものが中々多い。動詞が副詞の需要を省かうとしたことも同じだが、それは前章に少し述べた。ほんの二つ三つの名詞の例を擧げると、博多でムネタカオビ胸高帶といふのは律儀の人をひやかした語、伊豫の今治でアフギサシ扇指といふのも形式ばる人のことである。「おでこ」を津輕でトドコナンジキ、ナンジキはナヅキで額の古語、トドコは蠶だから蠶のやうな額の意である。同じ地方で眼の垂れた人をエドマナグ、多分「江戸見たか」といふ戲から出て居る。仙臺その他で野葡萄をメクラブドウ、盲人の眼に似て居るからで、駿河では又ウシノメダマともいふ。福島市附近で「ばつた」といふ蟲をオトゲエナシ頤の無い特徵を捉へたので、紀州の海岸ではオトガイナシは「つばめこのしろ」といふ魚である。蚪斗を東上總でフッパリドヂョウ、フッパリとは子供などの頰の脹れる病、「おたふくかぜ」のことである。氣仙地方では猫撫聲をナンダラゴヱ、お世辭によく「なんだらえゝ見だべ」などといふからである。佐渡では人にへつらふ者をエンバナネヅリ、椽端を甞めるやうにす

ろといふ意である。人の前へ出ては小さくなり、家で威ばつて居る男を蔭辨慶といふは標準語かも知れぬが、それを長州ではコタツベンケイ、仙臺ではロブチベンケイ、野州鹽谷郡ではインナカベンケイ、佐渡ではユリナタベンケイといふ。ユリナタもインナカも共に「ゐろり」のことをいふのである。

一六　癖と能力

私は此一篇の文に於て、自分の思ふことをすら〳〵と、殘る所無く說き盡すことが出來なくても、今更其責を國語教育の不振に持つて行かうとは思はない。しかし少くとも是から世に出て來る子や孫の爲には、もう少し國の共任務に當る人々に、考へ且つ働いて貰はなくては困るとは感じて居る。この七千萬を越ゆる大衆のうち、筆を執り又は壇に立つて、他に向つて物を言ふ人の數などは知れたものである。彼等は恐らく天分もあり、又それぞれ求むる所のある人なのだから、何としてでも餘分に勉强して、國語を一段と巧妙に利用することを練習すればよいのだ。普通教育のあてにせられて居る點は、寧ろ他の最大多數が心の内に持つものを、少しのこだわりも無く人に告げ得るやうにして貰ふことである。他人の言ふことを理解する方は、もう御蔭さまで可なり進んだと謂つてよいのだが、もう一つの表現の方は、不安心といふのが精々のお世辭である。五十幾年もかゝつて普通の人は、思つたことの半分も言へず、たま〳〵おしやべりが見付かれば皆口眞似だ。我々は無意識にうそをつかされて居る。斯んな國語教育がどこの國に有らう。標準語の良いものであることは自明の理である。何となれば良い言葉を標準語と稱するからである。しかし言葉を標準語たらしむるには、批判もしなければならぬ。講究もしなければならぬ。一つ一つの單語と句法とをぢつと眺めて、それが果して現在意味しようと思ふ心持と、ひたりと合つて居るかどうか、それと同價値もしくはより以上のものが、現にこの外にも得られるか否かを突止めても見なければならぬ。どんなえらい人で

も、今日の日本語の語彙の貧弱、數は多くても一方に偏して居ること、その統辭法の出來合ひで種類が乏しく、少し長い文章を綴ると、飽きてうんざりさせられるものしか出來ないことを、體驗して居らぬ者は無いのである（自分だけだと言はれることを怖れて、誰も彼も瘦我慢をして居るだけである）。かゝる狀態に於て今ある一部の物の言ひ方を標準語と認め、それを萬人に强ひんとするに至つては、物を知らぬにも程がある。

我々の國語は棄てゝ置いても變化して居る。一つの大都市のまん中に行はれて居る言葉ですら、時過ぎれば丸で面貌を改めてしまつて居ることは、三十歲にもなれば心付かぬ人は無い。それが感じの好いものであつたり、又出たらめの程無く唾棄せられるものであつたり、わざと巧らんで流行らせようとするものであつたり、人によつて判別も區々ではあるが、兎に角棒はずに置く限り、每日のやうに亂雜を加へて居るのである。第一に果して日本語と謂つてよいかどうか、先月は聽いたやうだつたがもうこの頃は誰も使はないといふ類の新語が、ろくに試驗も經ずにどし〳〵と生れては又消えて居るのである。日本語である以上は聽いてわかるもので無くてはならぬ。出來た當座から新語字引を引かなければ、何のことやら判らぬといふ新語を、勝手にのさばらせて置いて何が標準語運動か。大よそわけの判らぬことをする者は、今日の所謂有識者であると私は思ふ。

國語の學問が進んで居なかつた結果だと、多分後世の人々は誤解をすることであらう。それはどうやら事實に反するらしいが、兎に角國內の言語現象をよく觀察して、訛語と狹義の方言とを見わける注意だけは欠けて居る。訛語は何としても改むべきものだ。素より何れが正しく何れが訛かといふことは、爭へば幾らでも爭へるに違ひないが、

それは理論であり實際の生活としては、同じ一つの言葉を双方で違つた言ひ方をするといふことは、不便であるのみならず見た所も不體裁だ。一つに揃へるとすれば正訛舊新の論は別として、忍んで多數者の一致する所に、從はねばならぬのも亦致し方が無い。自分たちでは既に同語意識を失ひ、全然別の語と思つて居るものでも、元來一つだと判れば言ひ直させるのもよからう。それと是とは同一視し難いのは、折角我々がこしらへ上げて、今まで保管して居た他の色々のよい言葉が、果して是からさき入用は無いか否かも吟味せられずに、やたらに排除せられることである。歌謠に我國語を光らせようとする者などには、たつた一つの音節の多少でも大事である。音の異なる同義語の存在は多々益辨ずと謂つてよい幸福である。語彙の乏しい國民には是を省みないことが既に誤まつて居る。ましてや各地は生活の差異によつて、片方に全く無いものがこちらには出來て居る。よいにも惡いにも標準語には、まだ代りの無い語がどつさり有る。それを矯正してしまへば元も子も無くなる。訛語を嘲けるどさくさ紛れに、考へも無しにそんなものまで撲滅したのは、悔いても及ばぬ大いなる損失であつた。

其罪滅ほしとしては、努力して是から多くの佳い言葉の、新たに誕生するのを助産しなければならぬ。元來我同胞が言語の感覺に敏であつて、事物に適切な語を付與する技能にかけては、佛蘭西人などと優に比肩し得る上に、人がすなほに他の發明を賛同して、是を仲間のうちに採用する襟度も亦尋常で無かつたことは、前段に私が實證した通りである。言葉と內部の意味や感じとの、微細に打合ふか否かを判定する力に於ても、斯ういふ荒い生活をした海山の民に、不似合ひな位の長處を持つて居る。それが近頃のやうに聲と形とのゆかしさを愛づるの餘り、よくは知らぬが使つて見ようとするやうな、何を言つてるのか自分にもわからぬ演説をしたり、それを指摘せられるとさうで無いこ

とを證明したさに、後から努力して左傾右傾になつたりするやうな、なさけ無い狀態に變つたのは落ちぶれである。一日も早く心の底で思ふまゝの言葉を、大聲に發しても文章になり演說になるやうに、導いてやることが彼等の爲であると共に、又一國の幸福でもある。新語は以前の通り何人も自由に之を提案し得られ、且つ何人も自由に是を批判して、選擇使用し得るやうにしたいものである。是は固より或少數の學者の、宣傳や指導によつて到達し得ることでは無い。たゞ我々は卒直に又成心無しに、久しい過去の言語事實を學び知ることによつて、自ら我能力を解し、同時に御互ひの陷り易かつた癖が、どんなものであつたかを明かにし、共々に國の言語を何にでも役立つ立派なものにすればよいのである。事實を詳かに知るだけでは學問で無いやうに、思つて居る人が一番恐ろしい。そんな人たちが限りある我知識を根據として、五十年の未來にすら適用せぬやうな、無理な說法をしたがるからである。

昭和九年七月十日印刷
昭和九年七月十五日發行

國語科學講座
（第九回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社明治書院